

解説

1) 『第二部』の構造(上)

『ファウスト』の第二部は、第一部の如くにして読み、第一部の如くにして理解されるわけに行かない。或個人を所謂「主人公」とする普通の劇は固より、第一部を読んで理解した態度を移して第二部に対する場合にも、読者は最初から迷路に導き入れられることを感ずるであろう。第二部の諸幕に於いて正面から描き出されるものは、主として、ファウストが見、触れ、通り抜けて行く、社会的若しくは精神的な幾つかの「層」である。これ等の諸層は、例えば段丘のように一つの上に一つを重ねて、此処にそれぞれの像を結成する。併し此れ等を経過しつつ自己を作り上げて行くべき「行為者」ファウストは、屢々此れ等の層の描写の間に姿を没して、背後に暗示せられ、地底を潜流する者の如くに取り扱われる。故にファウストの心理や行動の直接の発展を跡付けようとする態度を以てこれに臨むとき、人はただ徒らに横幅の広き幾つかの断面図を、きれぎれに見せられるような感なきを得ないであろう。第一部に於いては、人は猶、書齋の独白から始まって悪魔との盟約に至るファウストの煩悶の発展、路上の邂逅から獄裡の別離に深まり行くグレーチヒェンの悲壮な運命に就いて、普通の意味に於いて劇的に一貫する糸を発見することが出来る。併し第二部となつては、この糸は、多くの場合、予想若しくは示唆せられるに止まって、云わばファウストの発展途上を取り巻く雰囲気の層と層とが読者の主要関心を要求するのである。固より細心な読者は、第一部に於いても既に第二部の手法が準備せられていることを発見するであろう。「アウエルバッハの酒場」に於いて、ファウストは僅かに二度、敬語を発するだけの傍観者で、全場の主力は、一つの雰囲気の----安易なる学生生活の一断面の----描写に集中される。「ヴァルプールギスの夜」の長き一場は、北方の陰惨奇醜なる魔物祭の光景と気分とを漲らせるために費やし尽くされて、それが側面よりファウストの「墮落」の状態を示唆するに止まり、行為者ファウストはただ魔女との舞踏とこれに続くグレーチヒェンの刑死の幻影を見ることとによって、劇的に前後と連携するのみである。「魔女の厨」に於いても、ただファウストの若返りを描くためのみならば、あれほどの空想の浪費を必要としないであろう。そうして凡そ主要なる断面の描写に集中して、これを積み重ねることによって全体の進行を、その精髓に於いて示唆する手法は、グレーチヒェン悲劇に於ける幾つかの小場面の排列によっても看取することが出来る。

既に第一部に対して提出される幾つかの俗人的常識的疑問----グレーチヒェンはファウストと幾夜を共にしたか？ヴァレンティンを殺した翌々日(3662)のヴァルプールギスの夜祭りから、黒馬に乗って疾駆して牢屋に馳せつけるまでの三四日の間に、グレーチヒェンは如何にして妊娠に気付き、胎動を感じ、子を産み、これを殺し、世間を彷徨して牢屋に繋がれるまでの経過を取ることが出来たか？等、等----はこの断面集中の構成法の間にも孕胎(ようたい)する。この構成法を、ファウストの内面的心理的描写によらずして、彼の経過すべき社会層、精神層の類型的描写と結合するとき、我々は第二部の手法を理解すべき主要な鍵を握ることが出来るであろう。

此の如き構成法に於いて『ファウスト』の第二部と比較せらるべきものは、ダンテの『神曲』、就中その「煉獄」である。此処では、その舞台面は、既に地理的に見ても、煉獄の山を縈(めぐ)って数条の帯をなす段丘によって構成される。そうして詩人ダンテの空想は、此処に無数の歴史的人物を配置し、これを同一の贖罪の雰囲気の中に投じ、彼等との接触や対話や導者の教示や自己省察によって、旅人ダンテの向上と成熟とを示唆するのである。その嶺に於ける「地上樂園」は『ファウスト』の天上の場に相応するということが出来てであろう。固より叙事詩『神曲』に於いては、各層の推移が連続的で漸層をなしている。戯曲『ファウスト』に於いては各層にそれ自身の危機を含み、その「煉獄」は云わば「地獄」の上を飛躍しつつ一より他に昇って行く。併しそれぞれの

「層」の描写とこれに含まれている問題とに深き関心を寄せ得ぬ者にとって、それが散漫で退屈なものに見えることは、両者を通じて変わりがないであろう。故に私は初心の読者をこの退屈から救い出すために、茲(ここ)に第二部の各幕各場に就いて、その構造の大略を概説することを企てる。

第一幕 風光明媚の地

此処で作者は、第一部のファウストを第二部の世界の体験者となるに堪えるまでに恢復させなければならぬ。学問に絶望して悪魔と盟約を結んだ彼、その恋人の母や兄の死の原因を作り、彼女をして子殺しの罪のために刑死させた彼----こういう罪過の意識を負い、こういう悲痛のどん底に呻吟する彼は、縦令(たとい)「花咲ける草野に横たわる」にしても、固より「疲れ果て、落ち着きなく、焦りて眠らんとしつつある」者でなければならぬ。若し此処から出発して恢復に到るまでの過程を内面的写実の途によって描写しようとするならば、作者は単にそれだけの目的のためにも優に一篇の戯曲を必要とするであろう。併し癒やして健やかにする自然の力を心の底から信ずる作者は、この恢復過程を表現するために一篇の良心史を以てするの必要を感じなかった。彼が横たわっている「花咲ける草野」に、彼の回春の力が籠もっていた。恵みある自然の力を結成させる小妖精----アーリエルを首長とするエルフの群れの歌が、「散る花の春の雨、もの皆に漂い落ち、野もせなる緑の幸(さち)、地の子等にきらめく」晩春の一夜の「四つの区切り」を、霄(そら)と深夜と早暁と日の出とを、歌い上げるにつれて、ファウストの精神も亦憩い、忘れ、癒え、蘇(よみがえ)る。換言すれば、深く美しきエルフの歌の節奏と音楽と詩とが、三十余行の間にファウストの恢復を譬えによって描き尽くすのである。この使命を果たすべき詩美の役目は誠に重大であるが、兎に角作者はこの手法によって一篇の良心史を短い一場に圧縮したのである。

「霊の耳には、響きを立てつつ」日の出が近づいて来る。恵みある自然の力を代表しながらも、光の激しさを恐るる黄昏と夜との生物として、民族的信仰の中に具体的存在を持つ、「優しき、身細なる姿」の小妖精は、花の台(うてな)や岩間や葉陰にその身を隠さなければならぬ。そうしてこの「大空の暁」の中に、爽やかに蘇(よみがえ)れるファウストが独り醒(めざ)める。彼は最早過去の囚虜ではない。彼は既に前途を望んで「最高の存在に向かって間断なく努力する」一つの力ある決心を固めた男一匹である。周囲を見廻せば、木や枝や葉や花が、色と匂いとを漂わせつつ次第に闇から浮かび出す。そうして山嶺から次第に低地に卸してくる日の光が遂に野に横たわる彼の眼を射るとき、彼は「沁み徹る眼の痛さに」もう眩(めくるめ)いてその身を背ける。----この一つの体験が彼の生活態度の転換を、第一部から第二部への内容的推移を導き出すのである。

それは一つの諦念(エントザーグング)である、宇宙の根柢から迸(ほとぼし)り出る「度を知らぬ猛火」を直接に把握せむとする願いは「人間の限界」を越えるものであるという、有限の自覚である。併しそれは絶望と時期とを誘発する代わりに、有限の立場を堅実に確守する者の努力と奮起とに導いて行く。有限の中に無限が反映する、「常なきものはただ譬えなれ」、それは無限なものとの譬喩(ひゆ)として苟且(かりそめ)ならぬ意義を持っている。かくてその飛沫に「多彩の虹の変幻の不易」を寓する滝が彼の狂喜を募らせるのである。「我等は生を、色ある反映のうちに握る」----この一句が第二部の世界の主導音となる。事業もこの意味に於いて追究される。そうしてそれが結局ファウストの「不死の部分」を天上に導き行く階梯となるのである。

この一場を瑞西(スイス)山中の或地域に置くことはゲーテ自身も異存がないと伝えられている。ファウストの横たわれる野が四林湖畔(例えばギイッチベルク)の景色に殆んどそのままに当て嵌まることは注目すべきであるが、併し彼処には滝がない。所詮これを一つの場処に限って解釈せんとするのは、詩人の結合的構成的空想の自由を無視する無用の穿鑿(せんさく)立てというべきであろう。

皇帝の居城、玉座の広間

ファウストがその力を試さんとする第一の「層」は宮廷の生活である、カイザーの身辺に近づいてその政治に参与することである。併しかくすることによって彼は皇帝と国家とに如何なる「事業」を寄与せんとするのであるか----その内容については未だ何等の明確な観念を持っていそうにも見えない、寧ろ漠然として一般に努力を持つ者となることが差し当たっての彼の目標であつたらしい。そうして彼を宮中に推薦する役目を帯びて、メフィストが単身此の場に出現して、カイザー及びその周囲との折衝を開始する。それは国家が差し当たり最も困惑している弱点に乗じてその救済策を示唆し、その救済者としてファウストを推薦すると同時に、一事の好況を煽って却って国家の墮落と解体を早める悪魔の事業を遂行せんとするのである。劇的進行のこういう框(かまち)の内部に、年若きカイザーを中心として、方(まさ)に瀕しつつある一国の状態が茲(ここ)に描き出される。

開幕と同時にカイザーは群臣を従えて出御する。御前会議の題目は一国の休戚(きゅうせき)に関する根本問題の討議である。併し若きカイザーはこの困難な、恐らくは如何ともすることの出来ぬ問題に当面することを好まない。彼が玉座に着くや否や、先ず感ずるものは彼が玩具として寵愛する阿房(あほう)がその側に見えぬことである。第一幕のカイザーに就いて作者自身は言う----「私はあのカイザーで、その国を失うべきあらゆる可能な性質を具備する一人の王者を表現しようとした、そうしてそれがあとになって実際その通りになるのである」(エッカーマン、『対話』第三卷、1827年10月1日)、と。そうしてそれに続いてゲーテ自身が説明するところから従って、我々は此の人の統治する国家の状態を簡潔に次のように叙述することが出来るであろう----彼は国家や臣民の福利を少しも念としない、彼の考えるのはただ自分自身である、一日一日と何か新しいことによって如何に自分を楽しませべきかである。その国では法の權威も正義も失われている、法官その人も犯罪者となり、犯罪者の側につき、未聞の暴虐が抑制せられず刑罰を受けずに行われている。軍隊には給与なく、規律なく、掠奪を以て自ら給与しつつある。国庫には現金なく補給の見込みもない。宮中の経済も亦同様で、包厨(ほうちゅう)も酒窖(さかぐら)も共に窮乏に陥り、宮内卿は其の日其の日のことにも困り果てて、既に高利貸しの猶太(ユダヤ)人に死命を制せられ、一切のものが彼等の質草となつて、カイザーの食卓にさえ借り越しの麵麩(パン)が上るような状態である。而も皇帝は彼の重臣等の警告と献策とに耳を藉(か)すことを非常に嫌忌する、彼はただ面白可笑しく楽しもうとするだけである。此処にメフィストの乗すべき絶好の空気が準備されているのである.....

この「楽しもうとする」カイザーにとって、最も気の置けぬ者は遅鈍な世離れた天文博士と、愚を装いつつ機微に迎合することを解する阿房(あほう)である。メフィストは前の阿房を酔倒させて早速その位置に押し込み、天文博士と連盟して「二人の横着者、阿房と空想家」とが玉座の左右を占領して、会議に倦んだカイザーの心を掌中に収める。彼の着目するのは国帑(こくど)の窮乏である。傭兵の横暴や、市民や騎士の直接行動や、法官の腐敗や帝威の失墜や、占有権の下部移行や----こういう根本的な無政府状態は固より国庫の充実によってのみ救済すべきところではないが、兎に角宮中の人々が国家の難局を打開する応急策として目前に最も渴望しつつある金の資源をちらつかせて見せることによって、彼は一同の心を攫(つか)むのである。彼の示唆するところは埋蔵若しくは隠匿せられたる地下の無限の財宝である、これを発見し発掘する能力のある「大学者」の登用である。大蔵卿は「阿房にしては馬鹿でないことを申しますな」という。宮内卿は「御殿で待ちかねているお土産をあれが持って来て呉れるのなら、多少の不正ぐらいは私は構いませんな」という。兵部卿は「阿房は賢いな、誰でも嬉しがるものを約束しおる、兵隊は何処からそれが来たかなどとは問いませんからな」という。ただ大僧正を兼ねる宰相のみは、「自然は罪、霊は悪魔」と称する坊主の立場から、これに賛成することを躊躇するが、勇み立ったカイザーは、そんな狐疑には耳を藉(か)そうともしない。「御前が詐(いつわ)るのでなかったら、この尊い手で親しくその仕事をやって見せるつもりだ」、「さあすぐに、さあすぐに！何時まで愚図々々致さなければならんのじゃ！」

とメフィストを急き立てる。併し天文博士がその性急を宥(なだ)めて、カイザーの最も欲している謝肉祭の歓楽を先ず果たすべきことを勧説する。そうして張本人のメフィストは、この宮廷の希望と興奮とを冷ややかに嘲笑する---福は功によって獲得しなければならぬ、功を積まずして福を獲(え)んとするのは馬鹿者共のすることである。メフィストのこの冷笑がこの宮廷に最後の断案を下すと共に幕は下りる。

仮装舞踏会

この場に於いてファウストは「自然と霊との力」を持つ「才幹ある男」として、富の神プルーツスに仮装して登場する。そうしてカイザーに示すに、地下より汲み上ぐるを得べき無限の黄金の幻影を以てする。メフィストはファウストを宮中に導き入れると共に、不換紙幣発行の準備を此処で整えるのである。

この仮装舞踏会の場は、ゲーテのこれまでに書いた幾つかの仮装劇の中最も壮大にして美しく仕組まれたものである。5065-5986の殆んど千句に垂(なんな)んとする一場は、現実や、神話や寓喩の人物を無数に寄せ集めてこれを渾然たる一体に結成する。その人物の夥(おびただ)しさは、構図の混乱に導くことなくして、整然たる郡図を形造りつつ明らかなる段落を切って排列される。そうして作者はその間に社会や性格の代表的類型を網羅し来たって珠玉の思想を惜しみなく撒き散らす。此処で我々に与えられるものはただ華麗にして変化に富む眼と耳との饗宴のみではない。それは又軽妙にして優雅なる戯れの中に人生の諸相を寓して人の思索を誘い、更に『ファウスト』に編入せらるる仮装舞踏会の場として、全篇の進行にも亦参加するのである。此処に去来する人物の群れは、最初に明るく美しき気分から出発して、次第に鬼気を帯び、怪奇の陰鬱を増し、遂に猛火の危険に於いて頂点に達するが如くに排列される。それは大仕掛けな宮廷の遊楽として曲中に孤立することなく、妖魔の幻術として凄味の多い幾情景を展開して来るのである。

読者の便宜のためにこの一場の骨子を抜き出して略説すれば---先ず登場する者は先触(さきぶれ)である。彼は全仮装舞踏会の序を述べるのみならず、新しき群れが次々に舞台に出て来る毎に、これを説明すべく役目をも負担する。併し行列が次第に現実世界の地盤を離れて怪奇の度を増すにつれて、彼は自ら困惑に陥って行く。そうして彼のこの困惑が城内の鬼気を深める用をなすのである。開幕の最初の当たっては、それは誠に「一つの晴れやかなお祭り」である。マンドリンの伴奏につれて伊太利のフィレンツェから遙々と「独逸なる宮居の栄を」追うて造化を携えて来た庭作りの女達、テオルベの伴奏と共に果実を運び出す庭作りの男達、二つの群れが絡み合いつつ「晴れやかに巻き付ける蔓のもと」、葉陰繁き行廊に積み上ぐる花と果実。次に出て来る者は母と娘である。婚期の遅れた娘のために今日こそ良縁を掴もうと、「懐をあけてお置きよ」と云い含める母親の白(せりふ)を受けて、其処に一群をなして集まってくる男女の見物人である。そうして第三に樵夫(きこり)や風来坊(伊太利の謝肉祭に出て来る一種の道化)や寄食者や酔漢や、諸の流派に属する詩人や---職業、生活法、正確などによって区別せらるる幾つかの類型が次第に登場して来て、此処で現実世界の仮装が一段落に達する。(5087-5298)。

第二段になって先触に呼び出さるるものは希臘神話の行列である。それは仮装舞踏会の場全体のプランに従って、優しき者を先に、怖ろしき者を次第に後ろに点出する。第一には優しきグラッチェの三人姉妹、第二には人の命数を司るパルツェの三人姉妹、第三には復讐と刑罰の女神三人組のフーリエ達---最後の者は「愛くるしくて、若くて、おべっか子猫」の姿をしてやって来て、「どんな馬鹿も自分の弱点を自慢にする」当世向きに、その怖ろしい本姓を名乗るのである。(5299-5392)。

其処に第三段の、ヴィクトーリアの行列が遣って来る。これこそ本当の意味に於ける行列である。一匹の象が脇腹に色美しい毛氈(もうせん)を掛け、一つの党を負っている。塔の上には翼ある勝利の女神が立つ。象の頸には智慧の化身として「垢抜けのした、織

細(かぼそ)い女」が乗ってこれを御している。その側を鎖に繋がれた二人の女人----「人の世の大なる敵」恐怖と希望とが歩いて来る。此処で希望が恐怖と共に人生の敵と目せられるのは一見奇異の感を抱かせるであろうが、ゲーテが或種の希望をかくの如く考えた理由は、例えば『ヴィルヘルム・マイスター徒弟時代』で漫然として運命の寵(ちょう)を恃(たの)むヴィルヘルムに対して、彼の隠れたる教育者アベールが反復その危険を警告している点を参照すれば、容易に釈然とするであろう。そうしてこれは又古代の思想でもあった。エウリピデスの『援を乞う女達』(479 句)の旧訳には「希望は人間の最大の敵である」という言葉がある。この「希望」をヴィラモーヴィッツ・メルレンドルフは *Vertrauensseligkeit*(軽信)と訳しているが、この意味の希望こそ正にアベールのヴィルヘルムに警告しているところであって、この希望をゲーテは他の処々に於いても排斥しているのである。(5392-5456)。

かくて智慧は恐怖と希望とを鎖に繋いで、塔上の女神ビクトーリアを讚美する。併しそれは凶らずも一つの波瀾を惹起した。これまでのところ仮装は、云わば一つの劇中劇であって、それはただ先触との温和な交渉によって、舞台の現在と関係するのみであったが、此処でそれは一つの活劇として、本来の意味に於ける戯曲的動作(ハントルング)を導き入れる。それは嫉妬の化身とも云うべき侏儒のツォイロ・テルジテスがヴィクトーリアに悪口雑言を吐いて先触の痛棒を喰らい、「胸の悪い塊になり」、「塊が卵になり」、「そいつが二つにはじけて」、蝮(まむし)と蝙蝠(こうもり)という双児になって外に逃げ出すからである。先触は驚き、見物の群衆は戦慄する。そうして舞台には俄(にわ)かに妖怪の気が漲って、先触は最早説明役の自信を持ち得ぬようになるのである。この動揺せる空気の中へ、第四段をなすプルーツスの行列が疾駆して来る。

今や舞台に出現するものは、四頭の龍馬に牽かれる一台の立派な車である。それは大勢を押しわけけるのでもなしに、あたり構わずひっぱられて来る。車上には玉座があって、それに「丈夫そうな満月の顔」、「ふっくらした唇、咲く花のような頬」を頭纏布(ずまき)の下に輝かしたプルーツス(ファウスト)が、言葉に尽くせぬ尊厳を以て腰をかけている。彼の背後には一つの重そうな櫃(ひつ)があって、その上にひどく痩せて磔柱(はりつけばしら)のような姿をした道化師の食欲(メフィスト)が蹲(うずくま)っている。そうしてこの龍車を童形の御者が御して来るのである。その捲き髪は漆黒の闇夜、これを宝石の飾り紐が晴れやかにして、その体には「濃紫の縁をとって、きらきらしたものをつけて」、肩から沓(くつ)まで流れる、可哀らしい着物が如何にもふさわしい。彼は「成人に半分なりかけの少年」で、その成熟の日こそ女達の待ち兼ねるものであるが、今でも既に「嬉しがらせたり溜息をつかせたり」するだけの魅惑は持っているのである。この「未来の色男」、「生まれついで誘惑者」は、彼自身の名乗るところに従えば詩の寓喩(アレゴリー)である。彼は浪費、詩、「自分の一番心底の宝を浪費するとき自分を完成する」詩人である。

舞台上の動作はこの童子と先触との問答によって始まる。後者はこの子の外貌を記述することは出来るがその本質を解明することは出来ない。彼は童形の馭者にその誇称する「贈与の力」を実証することを求める、そうして舞台上に一つの新しい動作を誘起するのである。童子はその指を弾いて真珠や黄金や宝石や種々の装身具を飛び出させる。火の子も亦彼の指から抜け出でて誰彼の頭上に点火しようとする。併し此れ等のものを拾い取ろうとする群衆の混乱も遂に何等の持続する成果を収めることが出来なかった。それは金ぶんぶんになったり蝶々になったり炎とならずに消え失せたりする。先触から見ればこれはまやかしの手品である。併し童形の馭者は「殻を割って中味を究めるのは、宮仕えする先触の仕事ではない」とこの非難を一蹴して、其の後の話を専ら車上のプルーツスに向ける。プルーツスが理想的の意味に於いて「富める者」で、自らの為に此の上を求めるものとはなく、不足しているもののあるところをその眼で見探して、「与えるという淨いお楽しみは、我が領物や幸福よりももっと尊く思っている」神であることは、先触の凡眼も猶看取することが出来た。詩はこの現実的な富者に於いて自分の親縁を見、これを翼賛しこれを装飾することを楽しみ、而も自分が彼を越えて更に富んでいることを自信する。内に充実せる者の自ら進んでする奉仕、権威に於いて上

に立つ者が、自分に仕える者の内容的優越に対して与える承認----此処に詩と富との理想的関係が成立する。

そうしてゲーテが此処に描き出した両者の相互承認は、トルストイが「芸術とは何ぞ」に於いて力説した狎(な)れ合い関係の見方を対蹠的に補充するものがあると云うことが出来よう。これに対して富の下劣なる方面を「貪欲」が、メフィストが代表する。ニーチェの所謂「贈与の徳」を本質として、この点に於いて詩と血縁を持つプルーツスの富に対して、これはたぐり込むこと、たぐり込んだものを離さぬことを主徳とするものである。而も貪欲自身の態度の中にも、守って離さぬ吝嗇から掻き集めて足ることを知らぬ貪婪への推移があった。この推移は女性の贅沢に媚びる必要によって余儀なくされたものである。メフィストのこの指摘を挟んで彼と見物の女群との間に裏店らしい喧嘩が持ち上がる。メフィストを目がけて突進する女群の運動によって、これまで舞台の上に組み立てられていた群衆配置(グルツビーリング)が崩れて其処に新しい空間(あきま)が出来ると、龍馬がそれぞれに、蜻蛉(とんぼ)のように二重になっている四つの翼を拡げて更に群衆を追い散らす。かくて「場所が綺麗にあいた」ところでプルーツスは車から降り立って、龍馬に命じて、貪欲を乗せたままに車後の櫃を取り卸させる。此処で此の場の最後に来る火焰の戯れが漸くその発端につくのである。

降り立てるプルーツスは先ず童形の馭者に暇を遣る。「紊(みだ)れて、斑(まだ)らで、荒々しく」異形の姿がひしめいている此処を離れて、「お前が澄み渡った眼で懐かしく澄み渡った空に見入るところへ、寂しさの中へ！」----換言すれば「舞台上の前戯」に出て来る詩人の国(63 以下)、若しくはニイチェが『ツァラトゥストラ』第三卷の「帰郷」に於いて描き出したような山上へ帰って、其処で「お前の世界を作れ」というのである。童子は再会を約して此処を立ち去る。そうしてプルーツス・ファウストは先触れの杖を借りて櫃の錠前を打って、愈々「宝の縛を解き」にかかるのである。青銅の鍋から盛り上がる黄金の波、冠、鎖、指輪、新鑄の金貨----群衆は争ってこれを我が物にしようとする。ファウストは杖を火に焼いて、これを以て叫喚(きょうかん)雑踏する群衆を押し戻す。それで稍(やや)静かになったところでメフィストは、黄金を捏ねてファルスの形を作って、群衆の女を揶揄するのに夢中になっている。かくて先見するプルーツス・ファウストの他には何人も予感せぬ舞台上の混雑の間に、思いがけず第五段のパンの行列が、「法律よりも更に大きい必然の力」に押されつつ、暴(あら)き群れの歌を先頭にして溢れ出してくるのである。そうして第四段と第五段との行列の交錯によって、舞台上の動作はその絶頂と終止とに達する。

この行列の中心に立つものはカイザー自身の扮する偉大なるパン、これに先駆する者はファウン、ザティル、巨人等の暴き群れ、その中には黄金掘の侏儒グノーム連中も交じっている、そうしてパンの大神を取り巻く者は優しきニュンフェの群れ。----こういう古典と北方との伝説から混成した一団がパン・カイザーを導き行かんするのは、沸き返る黄金の渦を覗き込むことである。グノームの派遣者が「奇しき泉」より湧き出ずる宝を民衆に頒布(はんぷ)せられんことを大神に請願する。そうして恐らくは此の間に紙幣に印行すべき親署を得ることに成功する。その先の成行はただ離れて目撃する先触の報告によって我々に伝えられるのであるが----小人どもがパンの大神を火を吐く泉の方へ連れて行く、彼は吹き上がる猛火を平然として覗き込む、付け髯が火中に落ちる、それに火がついて舞い戻って来て、彼の全身にその火が燃え移った、これを消そうとして駆け付ける群衆も同じくこの凄まじき火焰の中に吞まれてしまう、一般的の混乱が持ち上がって来る。そうして先觸の悲歌の後を受けて、プルーツス・ファウストが空中に雨を呼んでこの「火の戯れ」を鎮めることによってこの一場は閉じられるのである。

遊園

仮装舞踏会の翌朝、カイザーの遊園に於いて昨夜の戯れの中からもとに残る実なるものが此処に決算される。その実なるものはこれを二つと数えることが出来るであろう。その一つはカイザーの心に残る増上慢である、地水火風等の自然力を悉く彼の意志のま

まになるものであるかの如くに思い込ませるメフィストの皮肉な阿諛である。カイザーは「幻術の炎の戯れ」をば「魔法が験を見せて」くれたために無事に切り抜けることが出来た。この事実に基づいて、メフィストは、現実の火は彼を焼き、現実の水は彼を溺（おぼ）らすであろうことを、カイザーに忘れさせようとするのである。これを忘れさせることによって胡麻を擦り込もうとするのである。そうして第二の実なるもの、紙幣発行の許可も亦同じく悪魔の業であった。差し当たりこれは宮中と市中とに非常なインフレーション景気を誘発した。宮内卿は高利貸しどもの爪牙（そうが）を脱れ得たことについて、兵部卿は傭兵の給料を内金払いにして、改めて契約を結んだことについて、共に喜色満面である。呉服屋、仕立屋、料理屋、酒場、浮気女----これ等のものも皆福々としている。

ファウストとメフィストはカイザーの「宝の最高の番人」に任命されて、その宮中の位置を確立する。そうして大蔵卿は「私は魔法遣いを同僚に持つのが好きさ」というほどに有頂天の幸福を感じている。気むずかし屋の宰相さえ「老年の日になって仕合わせな目を見る」自分を祝福する。併し此れ等凡てのものが帰趨するところは、畢竟、享樂主義の氾濫である。事業欲の萎縮である。功なき福への耽溺である。カイザーが手づから授けた紙幣の用途が極めて露骨にこのことをつきつけて見せる。安逸、好色、飲酒、賭博----「新しい事業に向かう興味と勇気とを」欠く点に就いて、カイザー自身が既に愛憎をつかさどるのである。これを以て将来の計をなそうとする者はただ老阿房が一人に過ぎない。かくてこのインフレーション景気は第四幕に描かれた内乱の前提となって終わるのである。

暗闇の廊下

「最初に俺達はお上を金持ちにして差し上げた、だから今度は慰みをさせてあげなくてはならんのだ」----カイザーの望む慰みはヘレナとパリスを眼前に見ることである。ファウストがこの注文を気楽に引き受けたのは、それがメフィストによって極めて容易に仕遂げられると信じたからである。「一寸ぶつぶつ小声で唱えれば」、「人が側見をする隙に」すぐに二人を連れて来られるだろうと思ったからである。併し異教の民は基督教の悪魔メフィストの権限外に属する。彼に出来ることはただ彼等の像（すがた）を呼び上げる途をファウストに指示することだけである。ファウストは自分の身を以てこの「仕事」を遂げなければならぬ。かくてカイザーの気慰みの思い付きから、ファウストの上に前人未踏の大なる課題が振りかかって来る。そうしてこの思いがけぬ課題こそ彼を宮廷の生活から脱却せしめて、第二幕と第三幕とに驀進（ぼくしん）せしむべき一つの憧憬を彼の胸に植え付けるのである。

此処でファウストの必要とするのは、ヘレナとパリスの像であって生命ではない。故にこれを求めに行くべき場所は影の国ハデスではなくて、永遠なる図式（シェーマ）の国、母達の領土である。ヘレナの像の美に打たれてその生命を領有せんとする憧憬に燃え立つに及んで、彼は改めてハデスに下って、ヘレナを日光の下に返すことをヘルゼフォーネに請願する必要に迫られるのである。併し母達の国からあの美男美女の像を借りて来るのも亦容易な業ではない。其処は時間もなく空間もなく生命もなく、凡そ現実的なものと全く対蹠の位置に立つ「寂寥所」である。母達はその不動の国の中に、曾てありしもの、現にあるもの、未来にあるべきものの一切の図式を保存してこれを護っているのである。故にこれに到らんとする者は言説を絶し先蹤（せんしょう）を絶する荒涼と寂寥とに堪えなければならぬ。「踏み分けたもののないところへ、踏みわけようのないところへ」独往（どくおう）の旅を続けなければならぬ。その旅の巢に、彼はプルタルクによって示唆せられた「母達の国」を置いた、そうして其の国を充たすに、彼の自然科学の基本観念なる「根本類型」やその「変形（メタモルフォーゼ）」の一切の像を以てした。それは「形成、転形、永遠なる意味の永遠なる語り合い、それを繞（めぐ）ってあらゆる被造物の形象が漂っている」国である。従ってこの国への旅を決行するファウストを描くに当たって、彼は自然科学の研究に於いて自ら体験した、外部の窺知（きち）を許さぬ寂寥感を吐き出すことを得たであろう。この行を励ますものは、「戦慄は人類の最善の得分だ」というプラトン主義である、「君の所謂虚無の中に俺は一切を発見して見せる」

という「悪魔を知っているお人」の叡智である。彼はメフィストの渡す不思議の鍵を受け取って、母達の国から三足鼎(かなえ)を持ち帰るべく、足踏み鳴らして沈んで行く。

燈火明るき数々の広間

これはファウストの不在を繋ぐ、云わば間狂言である。留守を預かるメフィストは、宮廷に於いては矢張り廷臣である。「君達の方でどんな術が要るのか、それは問題外で、カイザーのお望みになるのは、ただ万事出来上がっているという事です」という宮内卿の言葉には、彼と雖も亦従わなければならぬ。此処に彼に残された唯一の活路は、ただ悪魔のフモールを弄して列座の注意を他に転ずることである。彼は美貌や恋愛のことに心を煩わしている夫人や少年を相手に種々の面白可笑しき療法を授ける。そうして押し寄せて来る受信者の夥しきに閉口し始めるときに、恰も好し、燭火(しょくか)がぼんやりして来て、霊の出現が予告されるのである。

メフィストが此処に応用する療法の一つに「同じ物は同じ物で！」というのがある。これは当時ハーネマンの提唱によって広く世間に尊信されたもので、ゲーテも亦決してこれを軽視していなかったことは、トレンデレンブルクの指摘している通りである。ハーネマンの名が如何に当時の世界に宣伝していたかは、渡辺崋山が和蘭(オランダ)の甲比丹(カピタン)ニュイマンとの問答を筆録せる『駄舌(げきぜつ)或問(わくもん)』によっても想見することが出来るであろう----

今時独逸の医人「ハーネマン」と言者、西洋第一也。其療法病に徹する事なく、一に「ナチュラル」に従い、譬は火を救うに火を以てし、水を救うに水を以てするが如し。古来の法を一変せり。年八十八歳に至り、嗚々斯甸禮幾(オオステンレイキ[オーストリア])の免許を受、専ら其説を広むるに諸国の名哲みな信従せざるはなし。此を以て拂朗祭(フランス)、大貌利太泥亜(ゴロートブリタニア[イギリス])及び我国の医人と会議して、終に「ハーネマン」が法に改む。勢い欧羅巴(ヨーロッパ)全州に及びければ、終には全地球中一変すべし。かかる名医古来稀なる事にて候。

騎士の広間

カイザーを第一として全宮廷が列席している間に魔法によって壁が開いて先ず舞台が出来上がる。それはドーリア式の古代神殿建築である。この建築を前にして、古典的と浪漫的との対照が、見物の会話の間に強調される。そうしてそれがこの一場に於けるのみならず第二幕第三幕を通じて益々深刻に取り扱われ行く一つの主題を弾ずる。やがて「祭司の衣を着けて、青葉の鬘(かつら)を飾って」ファウストが上って来る。これに従うものは香煙くゆる鼎である。舞台にはパリスが現れる。「しおらしく腕を頭のうしろに廻して」身を横たえて眠入る。其処にヘレナが出て来て、眠入れるパリスに近づいてこれに接吻する。女は立ち去りそうにして又振り返り、「しとやかそうに」又男の方へ戻って行く。男は眼を醒ます。彼はもう少年ではなくなった、大胆な一人の英雄となった。そうして女を抱き上げて連れて退こうとする。----この黙劇を見物人の会話によって描き出す間、作者は色々の対立を交錯して使用した。古典的と浪漫的、女鬘(ひいき)の男と男鬘(ひいき)の女との見方、官能的陶醉と儀礼的批判、若き者と年長けたる者との対照、等々。併しヘレナの美に心の底から掴まれた者は、祭司となれるファウスト、美に仕えることによって始めて、世界を「願うに値するもの、根のあるもの、長持ちするもの」と感じ出した彼其の人の外にはなかった。併し舞台の上で「ヘレナの掠奪」とも名付けらるべき場面が演ぜられるに至って、ファウストの欲求は百尺竿頭更に一步を進める。彼はヘレナの領有を必要とする者となって、パリスとその権利を争わんと欲する。「あの女を味わい知った者は、あれなしには生きられないのだ」。彼は無理矢理に女を攫(つか)まえる、そうするともうその姿が濁って来る。彼は鍵をかえしてパリスの方へ向ける、それが若者に触ると轟然たる爆声が起こってファウストは地上に倒れる。そうして彼を肩にかけたメフィストの捨白(すてぜりふ)の間に舞台が闇黒になって幕が下るのである。かくて第一幕は痛切に次に来たるべき物を要求しつつ終結に達する。

第二幕 円天井高く、狭苦しきゴシック風の部屋。

序幕の最後は、生身のヘレナを追究すべき課題を残して幕を卸した。第二幕はその通路を発見するために捧げられなければならぬ。併しファウストは今「ヘレナの魔睡に」かかって、「解きにくい恋の絆に誘い込まれた」不運者として昏倒している。彼をこの昏倒から癒やして、意識を回復した彼のために、ヘレナに到る道の端緒を作って遣るのがメフィストの役目である。彼は昔のファウストの助手ヴァークナーが今その師の後を継いで教授の位置に居り、人造人間の製造に熱中していることを承知している。そうしてこのヴァークナーの実験を機縁にして「在る者になった」ホムンクルスが、ヘレナへの道しるべの手がかりとなるであろうことを予察する。故に彼はファウストを運んでその昔の書齋の、昔のベットに連れて来ているのである。ファウストを奥に寝かして、懸幕を排してメフィストが登場する。

第一場の書齋は『第一部』に出て来た昔のままである。ただ一切が益々古臭く、埃っぽくなっているだけである。曾てファウストと契約を結んだ日に、それを着て新入生を揶揄した古裘(こきゅう)までが依然として古い鉤(かぎ)にかかっている。彼は昔の悪戯気が又蘇って来ることを感じつつ、それを取り卸して振って見ると、飛蝗(ばった)、甲虫、蛾などが飛び出して来て彼に挨拶する。さて古裘を身に纏って、からかって遣るべき人間を誘(おび)き寄せるために鈴索(れいさく)を引くと、屋鳴り震動して、恰も地震が起こったかのような異変が持ち上がって来る。そうしてこれに誘われて、例えば歌舞伎劇に出て来る御注進のように、臆病なのと勇敢なのと、二人の生(なま)学匠が前後して出場して、メフィストの辛辣な皮肉の材料となるのである。

最初に「長き暗き廊下をよろめき来る者」はヴァークナー博士の助手をしている万年学生である、善良で魯鈍で忠実で、その師を絶対に尊崇する学問虫である。メフィストはこの男の口を通じてヴァークナーの現状を聞知する。彼は幾箇月となく実験室に引き籠もって、「大きな仕事のために」、「炭焼き男のような恰好をして、耳から鼻まで真っ黒になり、眼は火を吹くために赤くなって」いるというのである。メフィストは彼をヴァークナーの許へ案内するか、ヴァークナーを彼の許に連れて来るかすべきことをこの男に命ずる。助手は師の厳禁に憚(はばか)ってそれをすることを躊躇する。----「わしは先生の成功を早めて上げる人間だよ」----このメフィストの一語が、彼の力を待たずにヴァークナーの実験が成功し得ぬことを暗示する。ホムンクルスはヴァークナーの試験場の中に成立するが、それは「人間素をゆっくりと組み立てて」「結晶」させることによって出来るのではなくて、悪魔の息がかからなければ生物となり得ぬこと----従って人造人間の試みは、純粋な実験としては不可能なこと----を、ゲーテはこの場に於いて言おうとしているのである。

助手は話を孰れとも決定せずに退場する。入れ替わりにやって来るのは昔メフィストに揶揄された新入生、今の「最新派」の「絶対家」の得業生である。彼は「精神」の自発的創造を絶対化して「経験の類(たぐい)」を軽蔑する。而もこの精神、この生命は「血」の中にあり、最も血の循(めぐ)りよき青年こそ「生命から又新しい生命を創る」もので、老人の如きは「時を過(あやま)たず叩き殺す」のが一番いいと主張するのである。精神----生命----血----青年。青年は太陽も月も星も血も悉く自己の中から創造するという。得業士はこういう風に思い上がっているのである。これに対してメフィストはリアリストである。この青年の無経験な反経験的なイデアリスムスが「近いうちに悪魔から足掬いを喰らわせられる」種類のものであることを熟知している。「とは云え、あんな奴がいたって我々は別に脅かされはせぬ、少し年が経つうちに、彼奴は別人になってしまうだろう」ことを確信して、超然として「機嫌よく」この青年の客気を揶揄する。「悪魔は年寄りだ、悪魔を理解したくば年寄りになるが好い！」----彼の皮肉は舞台を越えて見物席にまで投げ卸される。

中世流の実験室

一方ヴァークナーはその実験室にあって、メフィストの鳴らした鈴の音を、事の成否を決定すべき瞬間が切迫したことの合図と解する。試験壇の中は澄んだり濁ったり白光を発したり、盛んに活動を始めている。ヴァークナーは張り切った期待を以てこれを睨んでいる。そうして其処に押し込んで来たメフィストとの間に、人造人間の実験に関する、声を潜めた問答が遣り取りされるのである。ヴァークナーの立場から云えば、従来の「自然が有機的に成らせた」生成は人間の位にふさわしいものではない、思索者の悟性が「結晶」によって「優れて思索力のある脳髓」をも産出しなければならぬ。併しメフィストは頭からこれを馬鹿にしてかかっている。試験壇の中に「人間が一人拵えられる」ためには「恋人同士を煙たい穴へ閉じ籠める」より外に路がない。結晶によって出来るものはただ化石し「結晶した人間族」のみである。そうして其処に実際小人間が出来上がって来ても、彼は驚きもしなければ、敗北を感じもしない。それはホムンクルスの生成が、ヴァークナーの拵えた結晶によるのではなくて、彼自身の息吹を通わせることによって有機的に成らせたものに過ぎぬことを熟知しているからである。ホムンクルスも亦このことを知っている。「悪戯っ子の従兄(にい)さん、貴君も此処に来たのですか？丁度いい瞬間でしたね、有難う」----この言葉によって彼は自分の生成に対するメフィストの参与を確認する。併しメフィストもホムンクルスも共にヴァークナーの自欺(じき)をそのままに放置して、彼がこの小人間の「おとうさん」であると信じ続けさせて置く。この自欺をあばくものはただ成行のイロニーである。

ホムンクルスは優れた頭脳を持つ、彼には透視及び予察の能力がある----こういう觀念に於いてゲーテはパラツェルズス以来の伝統を継承する。併し彼は更にこの小人間に「肉体なき霊」の資格を授けて、其処から特異の憧憬を導き出した。ホムンクルスは肉体の桎梏なき霊として、肉体に繫縛(けいばく)せられた現実の人間よりも遙かに「身軽」である、靈活自在である。併しそれにも拘わらず彼は----特に働くことを欲する彼は----この自在の限定に、肉体を獲得して「成り出でる」ことに、悲痛な憧憬を懐くのである。云わば彼の存在は憧憬そのものである、そうして同じく「不可能」の憧憬に囚(とら)えられて昏睡しているファウストの運命と結び付く。凡そ肉体の獲得に憧るるホムンクルスと、正身(そうじみ)のヘレナの現実的領有に身を焦がすファウストと----共にその憧憬を現実性の方向に向けつつあるこの二つの魂の歴史には、響きを合わすべき幾つかの点が自然に成立するであろう。そうしてヴァークナーの提出する霊肉相剋の問題、そのパロディとしてメフィストの投げ込む男女不和の問題は、此の間におのずからその処を得て来るのである。ホムンクルスは寝台に横たわるファウストの希臘の夢、レーダの夢、ヘレナの胎生の夢を透察する。そうして既に前場に於いて提出されている浪漫的と古典的との対照の問題を継承して、憧憬者ファウストを古典の世界へ運び行くべく、浪漫的メフィストを説得する。ホムンクルスによってファウストのために道を発見しようとするのはメフィストの予定計画であるが、それが希臘への飛行旅行となることは、「北方生まれ」のメフィストには予想し得なかったのもであろう。兎に角彼は「自分の拵えた被造物にひき廻される」ような顔をして、三人連れで遙かに東南の方へ向かう。行く先はテッサリアのペネイオス河畔である、時は太陽暦の六月五日、古典のヴァルプurgの夜祭りの日である。

古典のヴァルプurgの夜

此の未聞の広さを持つ場面に於いては、人は先ず舞台の地理を脳裡に構成して置く必要があるであろう。テッサリアは希臘本土の北部にあり、北の方マケドニアに境いする。この境界をなすものはオリュンポスの神山を主峰とする一帯の山脈である。西南はピンヅス山脈によってエピルスと隣接し、東は海に近くペリオン、オッサ一連の山脈を持つ。そうしてこれ等の間に囲まるる広い盆地を、西北から東南に向かって走る一つの山脈が貫いて、更にこれを上テッサリアと下テッサリアの高原に二分する。ペネイオス(ペナイオス)はピンヅスの山脈を穿(うが)って西の方エピルスから流れて来て、多くの支流を合わせつつ東北に向かってテッサリアの上下の高原を横に貫流し、オリ

ユンポスとオッサとの間でテンペの谿谷の美を形造って、多島海に注ぎ入る、希臘屈指の大河である。ゲーテはこの広い地域を通観しつつ「古典のヴァルプールギスの夜」の舞台面を構成する。最初の場面は上高地の南端に近きファルザロスの野である、その傍を流るるペネイオスの支流、エニペーウス及びアピダーノスの両河の流域をも作者は「ペネイオス河上流の地」の概称の中に包括せしめて、此処に古代の魔物祭を開始させる(7005-7248)。その次のペネイオスの河神の歌に始まる一場(7249 以下)に於いてゲーテの脳裡にあったものは、恐らくペネイオスの下流、テンペの溪(たに)に近きほりであったらしい。其処から出発して、ヒロンの背上に乗って騎行するままに、ファウストの動作は北の方、オリュンポスの神山の麓まで移動する。そうして第三場(7495 以下)は再び最初のファルザロスの野、ペネイオス河上流の地に帰って、其処から最後の「エーゲーウスの海、岩礁の入り江」の場に移るのである。従って此処で舞台の中に取り入れられる地域は、南はファルザロスの野から北はオリュンポス山麓に到るまで、東はテンペの溪谷から更に多島海の海岸に及んでいる。

固よりゲーテはこの広い地域を 詩的見地によって圧縮し、細部に於いては地理によって縛られぬ舞台を構成する。ファルザロスとペネイオス上流とを一括して、其処に一つの場面を据えたことは前に言った。彼は又オリュンポス南麓のアポロの神殿の近くまで、山を越した向こうにあるマケドニアのピュドナを引き寄せる(7465-70)。かくて前者に於いてはテッサリアの風景を代表するペネイオスの名に、羅馬の運命を転換させたツェザールとポンペーユスとの決戦を結合し、後者に於いてはオリュンポスの神山の名に、マケドニアと羅馬との雌雄を決せる運命的な戦争の連想を盛った。共に古代世界の歴史的背景を作中に摂取し濃化するための詩的必要に従っているのである。(此れ等の点に就いては Trendelenburg : Faust II. S. 148 ff. 参照)。そうして更に舞台面の集中の理由のためにも、主要地点の距離を短縮してこれを近くに手繰り寄せる自由をゲーテは行使した。第二場のペネイオス河下流の位置が、オリュンポス南麓なるアポロの神殿よりも西に引き寄せられる(7466----「7248 ノ後」の註参照)。ファルザロスよりテンペの溪の方へ落ち延びるポンペーユスが、ピンズスの端山を越えて行くように記述される(7814)。約言すればファルザロスを中心として、東と西とが此の中心の方に引っ張り寄せられるようになっているのである。

開幕と共に、テッサリアの魔女エリヒトが出て、此処ファルザロスの野の光景を叙述する。時は首夏(しゅか)の一夜、そのかみ羅馬の自由の最後の運命を決した大戦の前夜を記念して、昔の陣営の幻が浮かんで来る。灰色に連なる天幕、暗夜に赤く燃える篝火(かがりび)。この禍の夜の不思議な赫(かがや)きに誘われて、ヘラスの伝説に出る魔物が群がり集って来る。やがて遅い月が欠けながらも猶さやかに照りつつさし昇って来て、天幕の幻影を消し、赤き火を色青くする。其処に月ならぬもう一つの光り物が飛んで来るのが見える。魔女は身を隠す。その光り物こそはホムンクルスの燈だった。彼とメフィストとは「もう一度輪を描いて浮いていた」あとで降り立って、運んで来たファウストをも亦地に卸す。希臘の土に足を触れてファウストの発する最初の一言は----「あの女は何処にいる？」である。

此処で三人の間に、別れ別れに銘々の運命を探そうという相談が一決する。成り出でることを求めるためにホムンクルスが飛び去ったあとに、この係恋の地に感激しつつファウストも亦ヘレナへの道を発見すべく別れて行く。あとに残るのは、テッサリアの魔女の噂に食指を動かして来たメフィストの好色のすさびである。丁度其処に集まっていた色々の怪物----黄金を護るグライフども、それを集めて来る大蟻の群れ、これを盗み出す隻眼のアリマスペども、それからどっしりと据わり込んでいる処女身のスフィンクス。彼はスフィンクスの毛皮の間に快(こころよ)げに身を暖めながら、漫談をしたり口喧嘩をしたりしている間に、上から落ちて来る物の音に驚かされる----白楊(しろやなぎ)の枝の間に歌声を試しているシレーネども、ステュンファロスの鷺鳥の羽ばたき、レルナの蛇の首のひしめき。併しすき者の彼は結局向こうにいて招いているラーミエの女怪に心ひかれて落ち着き兼ねている。そうしてスフィンクスの擲擲を背後に浴びつつ再会を約して此処を立ち去る。ファウストは先程もう一度立ち返って来て、スフィンク

スにヘレナの行衛を尋ねたのであるが、それは馬人ヒロンにきくべきことを忠告されて、間もなく(メフィストに先立って)立ち去ってしまっている。主要人物三人に関する限り舞台は空になる。かくて舞台は第二場に移るのである。(7080-7248)。

第二場に於いては、前のファルザロスの野に群がっていたグライフもスフィンクスもその他の者も姿を見せない。河の神、水のニュンフェ達。其処では河そのものも物言い、河のほとりの茂り葉の奥から人声に似た物音が漏れて来て、彼も何やらしゃべっているらしく、そよ風も亦戯れて喜んでいようで---万物皆声ある境である。ファウストは嘗て昏睡裡に見たレーダの夢を再びこの風景の中に置いて白日の夢を描く。其処に遠くから馬の蹄の音が響いて来て、気が付く隙もなく、白馬の騎手が既に眼前に立っている。それこそは馬人のヒロンだった。ヘレナの所在を知るべき唯一の手掛かりとして、前場でスフィンクス達が推薦した其の人だった。「駆け廻るのが嬉しい」ヒロンは、立ち停まるのももどかしく、ファウストをすぐに背中に招ぎ乗せて、急歩しつつ彼の問うところに答える。迂路を取りつつ巧みに持ち掛けていくファウストの質問に応じて、ヒロンはヘラクレスの男性の美、ヘレナの女性の美を絶讃する。今ファウストの乗っている背中こそ神話時代に、当時十歳の若い小鹿なるヘレナを乗せてやった背中だったのである。ファウストはこの「有難い席」に恵まれたことを発見して気もそぞろになる。そうしてヘレナに対する烈しい係恋をヒロンの耳に灑(そそ)ぎ入れる。死後「あらゆる時間の外で」ヘレナを手に入れたアキレスのように「私だって張りきったあこがれの力で、あの又とない姿を生(いのち)に返せぬ訳があるか？」というのである。ヒロンはこの熱慕を狂気と見なして、巫女マントにその根本治療を頼んでやろうという。ファウストは「他人同様下劣に」なることを嫌って、「直してなんぞ貰いたくない」と主張する。「そういう人こそ私は好きです、出来ないことに焦られる人こそ」---果然マントはファウストを知る者であった。彼女は神殿の暗い廊下から、ファウストを陰府の女王ペルゼフォエネの許に導き入れる。其処でヘレナの変換を哀願させるためである。(7249-7494)。

ゲーテは実際この哀願の場を舞台上の現在として書く積もりだった(エッカーマンへ、1827年1月15日)。併し彼は後にこの企てを抛棄して、完成せる『第二部』に於いては、ファウストは此処で第二幕から消失してしまう。併し憧憬の力を以て存在と生成とを獲得する道程は、この先ホムンクルスの挿話によって継承される。そうして生成哺育して倦まぬ大自然の讃歌を以てこの幕の全体が終局する。言わば人類の冠冕(かんべん)たるヘレナを影の国から再び生へ返そうとするファウストの地下の努力が、現実の人となるために遼遠なる第一歩を踏み出そうとするホムンクルスの舞台上の行動によって、不即不離に代表されるのである。この代表は我々の視界を、云わば生成の問題のアルファからオメガに至る全穹窿に亙って無限に拡張する。従って人は第三幕の始めに生きたヘレナを舞台の上に見ることを、最早不思議とはしないのである。

ファウストを陰府に降り行かしむると共に、舞台は再びペネイオス河上流の地に返る。第三場の果たすべき劇的進行の課題は二つある。一つはメフィストに怪醜フォルキュアスの姿を藉(か)して、第三幕のメネラス王城の老女を準備することである。もう一つはホムンクルスを哲学者ターレスの許に導いて、成り出でる途を発見させることである。そうしてゲーテはこの二つの課題を解くために、特に動乱する天変地異の世界と、相剋闘争の社会と、変幻定まりなき転形者と、騷擾の惹起者及び利用者とを設けて、これを不動、連続、漸進、整理等の支持者達---シレーネ、スフィンクス、オレアス、ドリユーアス、ターレス等---に対置する。この対立こそ地史学上に於ける水性論及び火山論の基礎をなすもので、後二者の争いは、ゲーテにとっては、世界観や人生観に於ける根本対立の一つの特殊なる顕現に過ぎない。併し正にそれ故に、この場合は水性論及び火山論を持ち込んでこれを象徴的に使用し、その基礎に横たわる根本対立を代表せしむべき絶好の機会である。かくて水性論者ターレスと火山論者の役目を負わされたアナクサゴラスとがこの一場の精神的支柱として登場する。一切がこの二つの中心を繞(めぐ)って構成されるのである。

更に詳しく見れば、第三場の進行は五段に細分することが出来るであろう。第一段は、

人々を海の祭りに誘い行かむとするシレーネ達の歌に始まり、前場初頭の河神の予感を現実にして直ちに揺れ出す地震が、更に「顫(ふる)う波きらめきて岸を浸し、静かに膨るる」海辺への憧憬を高める。やがて地殻を裂いて、地球を肩に支えて立っているアトラスの神のように地中から半身を乗り出して来る地震の神セイスモス、これを上から抑え付けて数千年の腰を据えているスフィンクス---この両者の対立が此処に先ず描き出される(7495-7581)。併しセイスモスの地殻に対する暴動は固より新事態の発生を促さずには置かぬ。新しき断層は処々に黄金の鉱脈を呈露する。そうして其処で第二段に行つて採鉱者の活動が始まるのである。第一場以来のグライフが、同じく第一場以来の蟻どもに命じてこれを採掘させる。小人のピュグメーエ達が極小人のダクティル共を指揮して冶金の準備に従事する。併し読者は此処でこの黄金採掘者の一団に内面的不和と対外的戦備とが問題となっていることを発見するであろう。労働者のダクティルや蟻はピュグメーエ達の支配下に立つことを欲しない、併し彼等の運んで来る鉄は又彼等を縛る鎖に鑄(い)られているが故に、彼等は心ならずも「まあ辛抱が肝要」と諦めるのである。このような不平を持つ労働力を組織しつつ、小人の長老は戦備を急ぎ、その將軍は攻撃を命ずる。目標となるものは池畔の鷺(さぎ)である。その美しき飾り毛である。小人はそれを奪つてその冑(かぶと)を飾ろうとするのである。殺戮は成功する。池は鷺どもの血に赤く染まり、飾り毛は既に「腹でつかちの、脚曲がりの悪漢の冑の上にひらひら閃(ひらめ)く」。併しそれは小人共の単純な勝利を以て終わりはない。血縁のよしみによって黒鶴は鷺の復讐を誓う。そうして来るべき危機を孕みつつ挿話は又次に移るのである(7582-7675)。

第三段はメフィストの再登場を以て始まる。それは 7248 以下を受けて、ラーミエの誘惑に踊る彼の痴態を描き出すところに主力を注いでいる。この「振り向き屋さん」は新しく湧出した小山のほとりに魔胡付きながらも、向こうで踊ったり、ふらふらしている「品を作った連中」から眼を離すことが出来ない。彼は「アダム以来誘(いざな)かれ通しのハン公」の一人として、従来散々馬鹿にされて来たことを百も承知しながら、猶「腐肉が笛を吹くときには踊る」ことを拒み得ないのである。ラーミエ達はその本来の姿を美女の仮面の下に隠し、媚態を尽くして彼を誘引する。メフィストは平生の撮(つま)み癖を發揮してこれを追い廻す。且つ誘い且つ逃げる妖女の群れと、悪魔の跛足(ちんばあし)を引きずりながらよろよろそのあとをつけるメフィストと、それに驢馬の脚を持ち、驢馬の頭に化けたエンプーゼが絡んで、類型的な両性関係の悲惨なる滑稽が醸し出される。そうして此の度も散々に翻弄されたあとに突き放されてきよとんとしたメフィストは、ぶつぶつ言いながら転石の間を踏み迷つて、漸く太古の姿を保つピンズスの最後の端山に辿り付き、其処で山のニュンフェなるオレアスと問答しながら、茂れる木下闇の間を螢火のように飛び行くホムンクルスの燈に邂逅する。そうしてこの小さい者が、並んで話していく二人の哲学者、ターレスとアナクサゴラスのあとをつけて、成り出でる道を聴き出そうとしているのだと聞かされる。「自分の手で成り出でるが好い」というメフィストと、「好い助言も棄てたものではない」というホムンクルスと。前者は後者が自らその運を試すに任せて、再び自分の道を追うて立ち去ってしまう(7676-7850)。

かくて第四段の舞台に残る者は、二人の哲学者とホムンクルスとの三人である。アナクサゴラスとターレスとの間には、火山論と水成論と---暴力としての自然と整理者としての自然と---の論争が行われ、ホムンクルスはその話のあとについて生成の道を聴き出そうとする。併し其処には、7675 の後を受けて、黒雲をなす黒鶴とピュグメーエとの戦争が勃発する。そうして後者が敗れて撃殺(さくさつ)の厄に逢おうとするとき、採掘の徒を火山や地震のあとに湧くその余孽(よげつ)と見做すアナクサゴラスは、「我が民」の救いを天上の月神へカーテに祈願する。そうするとこの祈願が聴かれたのもあろう、月の円盤が次第に大きさを増して地上に迫り、閃光と爆音とをたてて、人をも陸をも海をも滅尽(げんじん)させる勢いを示すようになる。アナクサゴラスは此の如くに見た。ターレスは何事をも見ず、「あれはただ観念上のことだった」という。併し假令(たとひ)観念上のことにもせよ、ホムンクルスは、月から墜ちて来た岩の仕業によって、円かった山が新しく尖り、鷺どもを殺した暴虐の行為者も、暴動の民をも帝王を

も共に脅し兼ねぬ「残酷な、血腥(なまぐさ)い復讐者も」----敵味方の「醜類」が一つに押し潰されたことを発見する。そしてこの転変劇(はげ)しき処を去って、ターレスに伴われて、「晴れやかな海の祭り」に出かけるのである(7851-7950)。

併し第三場は未だこれでは終局しない。第五段の初頭に、メフィストは反対側の山を攀じつつ「険しい岩坂を凌いで、古い榎(かしわ)の木のごつごつした根を踏んで、体を引きずり上げ」ている。そうして木のニュンフェなるドリユーアスと太古の樹木崇拜について問答しながら、もう一つ奥にある洞穴の中で「薄昏(くら)がりに三重になってしゃがんでいる」極醜の三人姉妹フォルキス(フォルキュアス)達の姿に驚愕する。彼女達は生まれながらの白髪で、三人で一眼一歯しか持って居らず、夜陰の生物として人里遠く暗いところに隠棲しているのである。メフィストは自分達の地獄にさえ似る者もないような醜怪極まる者共を所謂「美の国土」に発見して呆れながらも、巧妙なる阿諛によって彼等に取り入り、遂にこの定形なく個性なき三人の身を二人に攝(しょう)せしめ、第三の姿を自ら借り受けて、「地獄の水溜まりで悪魔共を脅かしてやる」ために姿を消してしまう。彼が第三幕においてヘレナの美の前に出現するのは、正にこの姿を以てするのである(7951-8033)。

かくて第三場の幕は閉じる。そうして第四場は内陸を離れて多島海の月下の入り江に移される。此処の美しき姿と美しい歌との絡み、離れ、合い行く間に、ホムンクルスが成り出でるための、幾万年をかけての抑々(そもそも)の第一歩が踏み出されるのである。此の場も亦凡そ六段にわけてその進行を追跡することを便宜とするであろう。

第一段は岩礁の入江に群れるシレーネ達の、月神に祈願する歌を以て開始される。其処にネレウス(ネロイス)の子、海の処女達が、海の怪物トリートンに騎(の)って登場する。彼女等はシレーネの歌い沈め、歌い寄せてくれた黄金や宝石を以て身を飾りつつ、海原の涼しさと楽しさを身につけて魚の如くに遣ってくるのである。シレーネはこの処女達に向かって、今日の祭りに、神に仕える娘として「魚より優れたる」あかしを見せることを求める。そのあかしは航海者を護り救う神、サモトラークに鎮座するカビーレンを齋(いつ)き来ることによって成されるであろう。ネレウスの娘達は領いて海路を東北に向かい、追い風のまにまに姿を消してしまう。シレーネ達はその後を影見えずなるまで見送って、又改めて月神に加護を祈願する。(8034-8081)。

其処にターレスがホムンクルスを連れて登場し、ネレウスの洞窟を音信れて生成の道を問おうとする。併しこの賢く、預言の力があって、好意に満ちた海神は、トロア戦争の昔から幾度か人々に助言して、それが凡て守られなかった苦々しさが身に沁みて、今は気むづかしき厭人主義者になってしまっている。今日は彼の娘達はその一人なるガラテアを取り巻いて父の面前に現れる筈の「上機嫌」な日であるが、それだけに彼は益々他の事に耳を藉(か)す気分にはなれないのである。ターレスの饒舌も遂に施すに由なく、ただプロテウスのところへ行けという忠告を聴き得ただけで、ネレウスの立ち去ったあとを、二人も亦舞台から遠ざかってしまう。これが第二段である(8082-8159)。そうして第三段は岩礁の上に居てカビーレン迎いの行列の帰来を遠望するシレーネ達の歌に始まって、ネレウスの娘やトリートン達とシレーネ達とが歌い交わすこの神の讚美によって成り立つのである(8160-8218)。

トリートンやネレウスの子達が遠ざかり行くのを見送って、ホムンクルスとターレスとがカビーレンの神々の噂をしているところに、プロテウス(プロトイス)が隠形のまに言葉を交える。そうしてこの神に生成の道を問うことが第四段をなす。神変自在なるこの神を人の姿で現れしめるために、ターレスはその「魚のように物好きな」性分を捕らえる。ホムンクルスの小さい火の物珍しさに、彼は遂にその正身(そうじみ)を現して、この「可哀い可哀い小僧さん」に生成の道を教えるのである。----広々とした海の中の、生の湿りこそ、彼が遣り出さなければならぬ最初の場所である。其処で小さい所から始めて、極小さいものを嚙(の)んで嬉しがって、段々育って行くが好いのである。ホムンクルスは折柄吹きつける磯の香の爽やかさを讚美する。プロテウスは「あの狭

い岬の鼻では、空気の爽やかさが猶更何と云いようもない」し、それに「前の方へ出ると、今丁度浮いて来る行列がとても近く見える」ことをホムンクルスに教えて、愈々海近くこれを誘い出す。ターレスも亦これと行を共にして、茲に「三人連の珍しい化物行進」が成立する(8219-8274)。

第五段に入って登場して来るのは、ロードスの島の工人テルヒーネスの群れである。彼等は云わば、月神の今日の祭りに、その親縁ある神々を代表する使者として祝意を述べに来たようなものである。海の神ポセイドン(ネプツーン)はその三又矛を彼等に授けて、今夜の海の静謐を約する。ロードスに祭らるる日の神の讃歌は、やがてその同胞なる「いとも優しき女の神」ルーナの喜び聴くところでなければならぬ。併しテルヒーネスの自讃が其処に立てられた日の神の像に及んだとき、プロテウスは、人工の脆弱を嘲(あざけ)って、「下界のいざごさはどんなにしたって、どこまでもただ無駄骨折りだ、生には波の方が余計役に立つ」という。そうして此れ等の言葉と共に忽ち身を海豚(いるか)に変じて、ホムンクルスを海上に連れて出る。彼は其処で「渡津海と縁を結び」、「其処で永遠な規範に従って動き、幾千ともない形を通して行」かなければならぬ。「人間になるまでには大分時がかかる」が、「人間になってしまうともうすっかりお仕舞いだから」、「上の仲間にはひろうとして焦って」はいけない。そうして人間となったときは、例えばターレスのように、「その時代の優れた人」となるが好いのである。---プロテウスとターレスのこういう餞(はなむけ)を交々(こもごも)聴きながら、ホムンクルスは遂に「永遠なる水の世界」へ乗り出して行く(8275-8338)。

第六段になって愈々ガラテアの行列の近づいて来るのが予告される。それは暈(かさ)の形に月の周囲を取り巻きながら飛んで来る白鳩の群れである、「姫神の御使い、思いに燃ゆるその群鳥」である。これを望みつつネレウスとターレスとがその神秘的意義を語り合っている処へ、キュプロスの島の岩室に隠してあるキュプリス・アフロディテ(ヴェーヌス)の貝殻車を奉じて来たプシュレス及びマルゼスの歌が響く。彼等は或いは海の牡牛、或いは海の犢(こうし)、或いは牡羊に乗って、ガラテアの行列を先導するのである。次いで岩頭に物見するシレーネ達が近づき来る行列に呼びかける。それは「軽らかに動き、程よく急ぎ、車のめぐりに圈(わ)に圈を描き、時に又列と列と入り乱れて、蛇(くちなわ)なす列をうねり」つつ、「神々に似て見るに威あり、死にせぬにふさわしき姿ながら、猶人の世の女子(おみなご)めきて、心を誘うたおやかさなる」ガラテアをかしづき来るのである。最初に父ネレウスの前を過ぎるのは、特に母ドリスの子等と呼ばれる、年若き娘達である。彼等は曾て彼等が溺死より救い出して夫とせる人間の少年達を伴い来たって、これ等の者にも亦彼女達と等しき不死を賜うことを哀願する。併し行きかい常なき波の如く、海の娘の恋も亦不易であり得ぬことを諭(さと)して、父は彼等に諦念を勧める。そうしてこの少年少女の悲しみつつ行き過ぎたあとに、愈々ネレウスの前に現れる者こそ正にガラテアである。

「お前だな、可哀い子？」---「おお、おとう様！嬉しいこと！」---これが親子一年ぶりの対面に僅かに交わし得た言葉である。乗用の海豚は立ち停まることを知らない。「圈を描くようにはずみを打って動きながら行列は過ぎる」。併し父にとっては、「ただ一目だけの嬉しさでもまる一年の埋め合わせになる」のである。この光景を見て、ターレスは「盛んに嬉しくなって来て」、万物を発生せしめ、保持する水のために凱歌をあげる。ネレウスはうねりながら次第に遠ざかり行く行列の中に、猶ちらちらと輝いて見えるガラテアの姿を目送する。併し彼女の貝車のほとりで、「恋の脈拍を身に感じているかのように」、「勢いよく燃えたつかと思うと又可憐になり、又うっとりとなる」炎は何であろうか。この男性的なあこがれの兆しこそホムンクルスの火である。ああ、それは「あの輝く玉座に触れて砕け」て、「今、燃え立つ。今、光る。もう流れて散ってしまう」。そうしてこれが正にホムンクルスの「体を具える」最初の歩みなのである。此処に、爆発し破壊する火山と異なりて、人と水と合い和(やわら)ぐ。ホムンクルスの炎はプラトン風なエロスとして、永遠の憧憬として、「万物を始めし神」に分関するのである。アフロディテとエロス、ガラテアとホムンクルス。この二つのものの相関の間に、地水火風の凡てを讃美する歌は響く。かくて第二幕は終結するのである。

2) 『第二部』の構造(下)

第三幕

序幕の末に突如として熱情的に点火せられ、第二幕に於いて悠揚たる幅広さを以て展開せられた憧憬は、此の幕に於いて遂にその目標に到達する。ホムンクルスの火が、成り出でむとする渴望によって、大海原の中に砕けて、散って、その遼遠な第一歩に就く間に、窈冥な地底に潜み入ったファウストは、陰府の女王を動かすことに成功して、茲にヘレナの影は故郷スパルタの地に復活して登場することになる。此処で詩人の先ず果たさなければならぬ役目は二つある。一つはヘレナを希臘的美の代表者として舞台の現在に喚び返すことである。ヘレナの周囲にあらゆる古典美を結晶させて戯曲的に動かすことである。もう一つはヘレナの存在を影と現実との境界線に置き、幽明両界の光が交錯する不思議な照明の下に立たせることである。此の二つの課題の解決に成功することによって、彼は始めてヘレナ的美を浪漫的の世界と対照をなすものとしてこれと折衝せしめ、これをファウストの生命をかけた恋の対象として尤もらしくし、彼の恋を受け納れ、アルカディーアの幸福を享け、オイフォーリオンを産み、又オイフォーリオンの死と共に陰府に帰り行くという運命の展開にふさわしい存在として、彼女を描くことが出来るのである。『第二部』の中で最初に着手され且つ進捗したこの幕の初稿に対して、当時猶生きていたシラーは、これが全篇の絶頂であるべきであると云った。この言葉は『第二部』の第二幕に対して正にその通りであることは、何人も疑わないであろう。第四幕第五幕に対してもそういうことが出来るかどうかは問題であるが、少なくともこの第三幕が全篇の分水嶺をなす峠であり、願望し且つ前望すべき曲折の危機であり、第五幕と相對して雲間に長揖(ちょうゆう)すべき主峰の一つであることには疑いがないであろう。

ゲーテは希臘美の典型としてヘレナ的美を如何に描いたか。言語芸術は彼女の姿の美を、彫刻若しくは絵画の如く視覚印象によって、若しくは視覚印象の記述によって、描き出す訳には行かぬ。彼がその為用いる手段は、周囲の人間及び事物に反映する美の効果及び彼女自身の動作である。彼女的美の効果は、人間にあっては彼女の侍女達及びリュンコイスとファウストとの讚美によって、事物に就いては特に宝石も顔負けするその輝かしさによって描き出される。そうして彼女の動作の美は、彼女の王妃らしい品格、彼女の神々と運命とに対する信順、女性の位置と権限に対する希臘的な自覚、危難に当たって取り乱さぬ沈着など、約言すれば徳性的美の強調によって、気高く、奥床しく人に迫って来る。この代表的希臘女性は、夫に従うべき妻の務め、夫の不在にはこれに代わって命令すべき妻の權威、夫の為に内を治むべき主婦の職責を自覚して、賞罰を正しくして婢僕を使役する彼女の特権の自信については、毫も動揺するところがない。久しき流離の後に夫に先立って帰って来た彼女は、懐かしい御殿の中に第一歩を踏み入れるにも「差し当たりの務めを考えながら謹んではいって行く」のである。彼女は婢僕に対しては「主人らしい言葉で、働けと呼びかける」。彼女を取り巻く侍女達を悪罵するフォルキュアス・メフィストに対して「寡婦の眼の前で召使いを謗(そし)るのは、主婦の家政権を無礼にも犯す仕業じゃ、褒めて好い者を褒めるのも、不都合な者を罰するのも、ただその人の権内にある」と彼女は叱責する。併し彼女の召使いに対する態度は、固より下々(しもじも)に対する超然たるそれで、同等の人間に対する場合の気むづかしい注文をも敬意をも共に含んでいはいはしない。「召使いが何者かとは主人は問わぬ、どう仕えるかを見るだけじゃ。」彼女が侍女達を庇護するのも、下々に対する憐憫の優しさで、彼女達とフォルキュアスとの烈しい喩(いが)み合いの間に割ってはいるのも「上に立つ主人にとっては、忠実な召使いの間の、私(ひそ)かに膿を持つ仲たがいほど損になるものはない」からである。かく考え、かく行うことは「神に恵まれた殿様の尊い奥方」の特権でもあれば品格でもある。

その上に猶「ツォイスの娘の身」として、今彼女の前に立ちはだかるフォルキュアスの怪しい姿にも、この女の口から出る死の威嚇にも、彼女はたじろがない。彼女には卓越

せる血統の自覚、危険に屈せぬ英雄の魂があつて、「並々の恐怖」に身を委ねることを恥辱とする。「何事も尊い神々にお任せする。神々は御意(みこころ)に適うように取り行われて、人が善いとしたり悪いとしたりすることには頓着なさない。死ぬべき者の我々はそれを受けて堪(こら)えて行く」---これが彼女の心の最後の寄せ処である。「后(きさき)たる者の役目、凡そ人たる者の役目は、どんな意外の事が脅しながら襲いかかるうとも、気をしっかりと雄々しく持つことなのです」。「此の者共は怯えるに任せてお置き！私は歎きはするが怖くはない」。かくて死の恐怖ではなくてメネラスの残忍な心への歎きが、彼女の沈着な品位のある足取りをファウストの砦へ導いて行く。そうして彼女を取り巻く侍女達の、「早呑み込みで愚かで、ほんに本姓露出(むきだし)の女子達、時の拍子に引き廻され、天気模様や幸不幸に弄(もてあそ)ばれて、その二つの執れをも気を平らにして通り抜けることを知らぬ」、びくびくわいわいする態度と対照して、彼女の気高さの印象は益々その光輝を発するのである。

併し作者は又疲れたる者として彼女を描き出す。彼女は侍女達の讚美には耳も藉(か)さず、フォルキュアスの悪意を以て揺り動かそうとする、過去の歡樂の思い出を斥け、ファウストの無際涯な献身にも傲(おご)る心なく、ただ「酷しい運命」に付き纏われているその身の悲しさを嘆く。彼女の美は「何処へ行っても男の胸をひどく惑わして、その人達が自分の身をもどんな尊い物をも護ってられるようにする」ので、半神も英雄も神々も亦精霊も、彼女を「今盗み出すかと思えば、誘い出したり、争ったり、彼方此方とひき廻したり、これを迷路(まよいち)の八衢(やちまた)に彷徨(さまよ)わせた」のである。回想すればこれまで彼女の上に降り懸かたり、彼女の周囲に起こったりした様々の運命が心の中に折れ重なって、すべてが一場の悪夢のような気がされるのである。影と現(うつ)との二つの光が彼女の上に二重に落ちて、ヘレナは自らその存在の真偽さえ疑わしくなる。「流離を終わりにしたい、何よりもただ憩(やす)みたい」---この気分の根調が彼女に幽明両界の境に立つ一種特別の存在を与える。これは希臘の古悲劇そのものには見出し難き、『ファウスト』のヘレナ独特の美である。

併しこれまで述べたところだけでは古典的美を表現しようとするゲーテの意図は猶尽くせない。作者は古代悲劇を模する韻律の美を以て、主としてヘレナの美しさを人の心胸に染み込ませようとしたのであろう。従って我々は、訳文に於いては如何にしても再現し難い原文の韻律に就いて一言しなければならぬ。第三幕第一場に於いて、対話の詩句は三韻脚(Trimeter)を原則とする。抑揚格(ヤムブス)の二節を一節と見做しての三韻脚で、従って抑揚格六節を以て一句をなす(U-U-U-U-U-U)のである。そうしてこれに配するに合唱の、二乃至六揚音を持つ、長短不定の句よりなる、文節的構造をなす詩形を以てする。トレンデレンブルクに従えば、Glykoneus(—"U-"U U-"U-")である。対話の三脚律と合唱の抑揚四脚律と---これは古代悲劇の詩形であつて、ゲーテはこの厳正な形式に従うことによって、典雅沈静な古典的美を近代の世界に再現せんことを企てているのである。第二場に入っても、ファウスト登場前のヘレナ及びパンタリスの白(せりふ)には猶この詩形が継続する。併しファウストの登場と共に近代悲劇の詩形なる抑揚五脚律に移行し、以上の詩形が共に尾韻を用いぬ中に、リュンコイスの「奇妙にも亦親しく」響く押韻の言葉が挿入される。これに促されてヘレナとファウストとの間に押韻問答が行われ、その練習に伴ってこの古代の美人と近代の英雄との結合が果たされた後は、ヘレナが尾韻を以て語ったり、ファウストが三脚の律を以て物を言ったりする(9435-41)。そうして塞がれていた水脈が打開されたかのように、これまで無押韻五脚律を以て語っていたファウストも、四脚又は五脚の押韻句を以てその志を述べるようになるのである。そうして第三場に至っては、以上の諸詩形に八揚音の揚抑四脚律(Trochäischer Tetameter)や、僅かに二揚音の短句をも交えつつ、希臘人も近代人も、押韻したりしなかつたり、その場の気分に応じて自在に語ったり歌ったりする。かくて舞台上の事件としてファウストとヘレナとが結婚するのみならず、韻律に於いても亦古典的と浪漫的との結合が遂げられるのである。

スパルタなるメネラス王の宮殿の前

ヘレナは捕虜となれるトロイヤ女の侍女達を従えて、再びその父の家、幼児兄弟や姉妹と遊びつつ育った処、夫メネラスと幾年月を共にした宮殿の前に出現する。トロイヤは陥落した、彼女は再びメネラスに奪還された、帰郷のための遙かなる船路の後彼等は遂に祖国の入り江に着いた、そうしてメネラスが海岸でその兵を閲している間に、彼女は先立って家に帰っていることを命ぜられたのである。帰って彼女のすべきことは、婢僕の人数を調べ、取り締まりの老女に託してある宝の数々の無事を確かめ、それから神々に供うべき犠牲の用具を整えて置くことである。併しメネラスは犠牲として「殺そうとする、生きた、呼吸(いき)する物のことは何と斥(さ)しても云われなかった」。彼女は船中であって夫が不機嫌に、言葉少なに自分に対していたことを想起する。そうして自分がその犠牲に選ばれているのではないかという疑念を持つ。併し彼女は自分の運命を「尊い神々にお任せ」して、主婦の任務に従って留守中の管理を査閲すべく、静かに宮殿の高い階段を昇って行く。そのあとを見送って、女主人の幸ある帰郷を祝う侍女達の合唱の歌は響くのである。

併し其処にヘレナが、立腹と驚愕の様を顔に見せて、惶(あわただ)しく又屋内から立ち返って来る。そうして彼女と合唱先導の女パンタリスとの問答によって、何事が起こったかが明らかにされるのである---彼女が久しぶりに懐かしい家には行って行くと、廊下は荒れ果てて、いつもは忙しく往復する男女の召使いの姿も見えず、ただ竈の残り火の傍らに、覆面をした大女が一人、蹲(うずくま)っているのだけが見出された。この怪物は、働けという女主人の戒告に逢っても身動き一つせず黙っていて、ヘレナが更に奥の方、寝室や宝蔵を見に行こうとすると、急に立ち上がって横柄に彼女の途を遮った。「瘦せぎすの大女、凹んだ、血走って濁った眼、目をも心をも惑乱させるような奇怪な姿」---それに驚いて彼女は今、アポロの神の光が輝いている戸外の日向に急いで出て来たのである。

この話の間に問題の大女が、ヘレナの開け放しにして来た玄関の扉の奥から、身を以て現れる。それは我々が第二幕で見たメフィスト・フォルキュアスであった。そうして侍女と彼女との罵り合いが持ち上がって来る。この場合後者の言うところは、悪意に充ちてはいるが急所を外れているとは言い難い。美と廉恥との両立し難さ、戦乱の間に育ち戦争の為に捕虜となった女の娼婦的生活及び娼婦的性格---こういうものを指摘しつつフォルキュアスに剋(けず)られる侍女達を、ヘレナは庇う。併し口に出された言葉にはこれに対応する宝物を喚び上げる呪力(じゅりょく)があると信ぜられていた希臘に於いては、呪詛や罵詈の為に醜怪の妖魔の名を口にするには、そういう「不吉な象(かたち)の恐ろしい姿を呼び寄せる」ことである。それが彼女の周囲に立ち罩(こ)めて、ヘレナは「身は故国の地に居ながら陰府(よみ)にひき込まれて行くような心持ち」を覚える。実は現世のものであるか？実は陰府のものであるか？ヘレナは老女のフォルキュアスにその解明を求めて更に第二の打撃を---老女が予め手許に準備して置いた打撃を---受ける。それは彼女がヘレナの過去を掘りかえして、男から男へ移っていったその生活をどす黒い色に描いて見せた上に、最後に影として影のアキレスと結婚した死後の伝説までも持ち出して来るからである。ヘレナは自分の現実性について自信が持てぬところまで追い詰められる。「私はもう消えかかって、自分にさえ影となってしまうような」---こういいながら彼女は喪神して、侍女の一群の腕に倒れかかるのである。侍女達の合唱は、フォルキュアスの毒舌に沈黙を求めて、藻抜けそうにしているヘレナの魂を取り留めるように祈念する。

やがてヘレナは意識を回復して再び舞台の中央に立った。今彼女とフォルキュアスとの間に問答されるものは、犠牲の準備と犠牲の生物とのことである。前者の用意はもう出来ている、後者としてメネラスは何者を考えているのであろうか？「お后様、御自分でございますぜ」とフォルキュアスは打ち明ける。ヘレナは犠牲の鉞(まさかり)の下に兎に角名誉の死を遂げるであろう、併し侍女共は「捕索(つな)にかかった鶯(つぐみ)のように、列をなして吊されてばたばたしながら」縛り首の辱(はずかし)めを受けなけれ

ばならぬ。フォルキュアスの威嚇の覗(うかが)う処は、物に動ぜぬヘレナではなくて、軽浮な、生を楽しみたい心一杯の侍女どもである、彼女達の哀願を通してヘレナを動かすことである。「お后様は物思いに沈んで脇の方に立ち、腰元共は刈られた牧の草のように萎れ返っている」中に、彼女は構わず、ずんずん犠牲の準備を進めて行く。彼女の相図によって何処からか立ち現れた侏儒の一群が、命令通りに素早く事を運ぶのである。

今は侍女の中、事に堪えるのは一番年上のパンタリス一人である。彼女は調子を変えてフォルキュアスに対して協調的に出て、この危機より脱出する道を指示することを求める。後者はそれはヘレナ一人の決心にかかっていることを即答する。救いはただ「スパルタの背後を北へ高まって行って、タイゲトスを背に負うあの溪山(たにやま)」にのみある、メネラスの留守の間北方から侵入して来て近隣を征服し、其処に棲み着いている異人の砦にのみある。この「大胆な一族」は一人の首長を戴いている。この首長は「捌けて、果敢で、姿が好くて、希臘人には稀なほど物わかりのいい男」である。彼等は所々に押し込んで来るが、財物の悉くを掠奪せずに僅かの贈り物で満足して帰って行く。彼等の砦の石垣は、希臘の建て方の、自然石の上に自然石を重ねる原始的な遣り方と違って、「如何にも頑丈に、如何にも接目が合って、鋼鉄のような、鏡らしい、滑らかさがある、これを攀登ろうとしたところで---その考えがもう滑り落ちる」。「そうしてその内側は大きな中庭の連なる広場で、この周囲をあらゆる種類と用途との建物が取り巻いている」。その建物の中で見られるものは「柱、小柱、迫持(せりもち)、小迫持、露台、廻廊」それに「世界ほども広い広間に」掛け列(つら)ねた色々様々の紋所。その広間は又踊場にもなって、「金髪の捲き毛の、滴るような少年の群れ、いい匂いのする若々しい男達」が女共の舞踏の相手になって呉れる、王妃さえその決心をすれば、こういう砦がしっかりと彼等を保護して、敵に指をもささせないのである。併しメネラスの心を底からは疑い兼ねて、ヘレナが猶躊躇しているところに、遠方から喇叭や角笛の音が響いてくる。

これはメネラスの軍隊であるとフォルキュアスは説明する。侍女達は慄え上がって周章狼狽する。ヘレナも心に決するところがあって身をその砦に託しようとする。彼女はフォルキュアスに言う---「お前は悪魔だ。それはよく気づいている。お前は善事を悪事に転ずまいものでもない。だが、どの道その砦へだけはお前について行こう。ほかの事は心得ている。それについて后が何をその胸の奥に密やかに隠しているか、それは誰にも知らせぬことにしよう。婆や、先へお立ち」。かくてその砦への行進が始まるのである。霧がエウローラスの溪から立ち昇って遠近を罩(こ)める。鶺鴒(くぐい)の声が涸(か)びた音に響いて来て、死を告げるといふその歌の話の事を想起させる。霧が益々濃くなって互いの姿も見わけ難い中から何物かの閃くのは、陰府に導くヘルメスの黄金の杖ではないかと疑われる。---こういう合唱の歌を歌い行く間に、彼等はいつの間にか砦の壁に面して立っているのである。

砦の内庭

侍女どもは雀のように囀り、ヘレナは女王の威厳を以て静かに立っている。かくて霧のまぎれに消え去ったフォルキュアスを待つ間に、城内にはもう賓客接待の設けが忙しく始まった。処は「多くの物を不思議に一つに寄せたような砦」の中庭である。この中庭を取り巻いて、例えば文芸復興期の伝説画の背景の建物のように、高層の行廊が繞(めぐ)っているらしい。召使いは其処から階段を降って、玉座をしつらえるに必要な、御座への段(きざはし)、氈(かも)に茵(しとね)、戸張、天蓋の類を運んで来てこれを中庭に飾り立てる。ヘレナは招かれて既に玉座に上がり、侍女達も彼女の左右に居流れて、若者達の美しさにも嗜(たしな)みにも歓待にも、すべて満足の意を表す。其処にファウストが「気高い品位と親しみのある物腰と」を以て廊から降りて来て、縛られたリュンコイスを随えて玉座に歩み寄ってくる。後者は「気の頂にいる山猫にも劣らぬ」眼力を持っているために、これまで物見の役を申し分なく勤めて来たのであるが、今日はヘレナの美に(南から出る太陽に)射すくめられて、すっかり珍客の来訪を知らせることを怠ったのである。彼の緩怠の罪は万死に当たるものであるが、ファウストはその断罪をヘレナに委ねて所罰も赦免も彼女の意志のままにすべきことを申し出る。「裁判をさせ

る、指図をさせる」というのは、希臘育ちの女にとっては思いも寄らぬ「大相な権威」を与えられるのである。彼女は「裁判者の第一の義務として、被告の申し立てを聴きましょう」という。そうしてこの被告の申し立てこそ、彼女にとっては更に新しい驚きでなければならぬ。無際涯の帰依、無際涯の献身----これは愛に狂える希臘の英雄達の「今盗み出すかと思えば、誘い出したり、争ったり、彼方此方と引き廻したり」する愛し方とはまるで違った行き方である。「私の身から起こった禍を私が罰することは出来ませぬ」、「神に憑かれた愚者には恥辱は与えられませぬ」----これが彼女の判決である。

そうして赦免されたリュンコイスが、此処に来る征戦の途すがら自ら戦い取った珍宝を悉く彼女に奉獻しようとするのを持ち去らせて、ファウストは城内のあらゆる金銀宝玉は固より、国も城も兵も悉くこの輝ける美に捧げ、自ら彼女の臣下となって、「崇拜者と従者と番卒とを一つに兼ねる者と思し召し戴」かんことを懇請する。中世騎士のこういう女性崇拜が、これに馴れぬ希臘女の心を驚かしつつこれに媚びることは言うまでもないが、彼女は猶沈着にその希臘的立脚地を保持する。ファウストはその玉座に呼び上げようとするとき、彼女は、「お話致しとうございますから、まあ階段を昇って私の傍へお出でなさいまし！空いている席が御主人をお呼びしておりますわ、それで私の席も固まりますでしょう」というのである。

かくて玉座の上に相並んだとき、ヘレナの唇から出る第一の問いは何であるか。それは新しい民族の新しい語法である。リュンコイスの言葉の押韻法である。「一つの音が他の音に馴れ寄り、一つの言葉が耳に親しむと、他の言葉が来て、前のを愛撫するよう見え」るのは何の秘密によるか。ファウストは嘗て『第一部』に於いてヴァークナーに答えた(534-557)と同様の精神を以て彼女に答える。「君はとても心を心に牽き寄せることは出来まい、若しそれが君の心から出るものでなかったら」と彼処では言った。「それは何でもありません。出れば好いです、心から」と今彼は言う。そうして二人の心の往来を示す掛け合いの白(せりふ)がすぐに押韻の練習になるのである。

ヘレナ

では聞かして下さい、私もあんなに美しく話されるのでしょうか、どうしたら？

ファウスト

それは何でもありません、出れば好いです、心から。
係恋(あこがれ)が胸に溢れると、
顧みて問う----

ヘレナ

誰か楽を共に享けると。

ファウスト

そのとき霊の見えるところ、未来を断ち、過去を断ち
現在のみが----

ヘレナ

我が世のさち

ファウスト

それこそ宝、大利益(りやく)、手形もと手。
さて裏書きは誰がしましょう？

ヘレナ

我がこの手。

此の如く、今日でも独逸の母達がその子にしているように、ファウストは問答しつつ

ヘレナから押韻をひき出して来るのである。(この方法は日本の子供のする尻取りの遊びと比較して、両国語の根本的相違に触れるところあることに注意すべきである。)そうしてこの練習の間に二人の手と手とは既に重ねられている。それが肩と肩、膝と膝とに波及することは、羨望の眼を以てこれを見る侍女達の言葉によって叙述せられる。遠い世に様々の恋を経て来てヘレナは、この新しい恋によって、我と我が身が、「ひどく遠いようにも、ひどく近いようにも」、「世に住み古したようにも、まるで世附かぬようにも」思われる。併し彼女が心一杯に言うを得るところは、「私は此処に居る！此処に！」という、充実せる現在の感じである。そうしてファウストがこの感じに力添えする----「存在は義務です、よしそれが一刹那であろうとも」。

併し此処に惶(あわただ)しく入り来れるフォルキュアスが、メネラス王の来攻を告げて、二人の恍惚たる夢を驚かす。とは云えそれは「婦人達の恩顧に値する者は、ただ最も鞏(かた)くそれを護り得る男だけです」というファウストの白(せりふ)に裏書きして、二人の仲を益々固める用をなすに過ぎなかった。彼は即座に兵を派してこれを防がせる。そうしてこの賢明な強さが合唱の群れの信頼と讚美とを誘って、この世にも稀なる男女の結合が、勇士に守られ美女に侍(かしず)かるる美しい安全感を持つようになるのである。最後にファウストはかくて護られたスパルタの地を白(せりふ)に描き出す。そうして昔ヘレナを生んだスパルタ----今ヘレナに捧げられたスパルタの讚美が、次第に牧歌的境地に人を誘い入れて、峠を繞(めぐ)らしたファウストの城からアルカーディアの楽園めいた自然に、舞台はおのずから変わって行くのである。

木蔭多き森

此処はアルカーディアの、岩に凭(もた)るる園亭と森林との舞台である。ファウストとヘレナとは、岩窟に続く園亭の奥深く、世離れた共棲の生活を送っている。舞台の上では侍女達が別れ々々になって木蔭の処々に眠っている。其処にフォルキュアスが登場して彼等と呼び醒まして、この岩窟の中の不思議を語って聞かせるのである。----岩窟の中は「底知れずの深い処」で、広間に広間、庭に庭が続いている。ファウスト夫婦はただフォルキュアス一人を召使いにして、ひっそりした新婚の生活を送っているが、彼等の間には既に男の子が生まれて、「裸で、翼のない天童(ゲーニウス)のようで、ファウンに似ているが、獣らしい処がない」その子の愛らしさが、彼等の余念なき団欒の楽しみとなっている。併しオイフォーリオンと名づけられたこの子の、あまりに飛躍的な、冒険的な性格が両親の憂慮の種である。一日、岩から岩に跳び渡っていた彼は荒々しい峽の裂け目に落ち込んで了う。併し間もなく彼は、花模様のある衣装を付け、総(ふさ)や紐で飾り立てられて、手に黄金のリュラを持って、アポロのように輝いて又岩角の崖に出現する。

親達は「無上に嬉しがって、替わり番こに相手の胸に抱き突き合」った。それもその筈、オイフォーリオンの頭には後光が射して、「あらゆる美の、未来の大家」のように、「永遠の戦慄がもうあの子の手足を貫いて動いている」ように見えるのである。フォルキュアスのこの話に対して、侍女達は希臘神話に於ける、マーヤの子ヘルメスの話を持ち出す。この神も亦アルカーディアの洞窟の中に産まれた者である。併しその時洞窟の中から響いて来る音楽の響きが魂の底からの感動を誘って、古代の神の物語を「時代後れ」に感じさせる。この浪漫的な新しい音楽は、希臘育ちの女達にも、「病気が今直ったようで、心が軟らかくなって、涙脆い喜びを」感じさせ、外界の日の輝きには背いても、「魂の中に夜が明けて、全世界にないものを自分の胸のうちに見付け」させるのである。この音楽につれて、ヘレナとファウストとオイフォーリオンとが登場する。

それは誠に輝ける三人組である。併しオイフォーリオンの「地びたにこびり付く」ことを嫌って「どんな空へも押し騰(あが)るのが、やまれぬ願いだ」という性分が、この"Mein, Dein und Sein" (私のもの、貴君のもの、あの子のもの)を破壊する危険を孕んでいる。言わば自分の性分を極度に廊大して見せているオイフォーリオンに対しては、悪魔を盟友とする不適者も、「程好くしろ！程好くしろ！」という親々の愚に獅噛み付かずにはいられないのである。親々の心を舐(く)ってこの地を飛び去り兼ねているオイフ

オーリオンは、侍女達を輪舞に誘って、それで「ずっと楽」な気持ちになることを感ずる。彼等は皆彼に心を寄せて、逃げながら彼に掴まれることを願っているのであるが、併し彼はこの素直な娘達には眼も呉れずに、「大勢のうちでも一番気の荒いのを」追いかける。「造作なく手にはいったものは僕は嫌いだ、ただ無理に手に入れたものが僕にはひどく嬉しいのだ」と彼は自称するのである。とは云え、彼に掴まされたその娘は、意に従うことを拒み通して、焔となって空中に燃え昇る。そうしてその誘惑が、彼を登高と没落とに導くのである。彼は岩又岩を踏んで益々高い処へ跳ね登って行く。登るにつれて、眼界は広がり、勇氣は倍加する。その時彼の耳にきこえるものは遠くにある戦争である。彼は戦い、勝利、誉れにあくがれ、これを遠望しているに堪えずに「憂いと恨みとを共にする」ことを欲して、翼を張って飛んで行こうとする。下から仰ぎ見つつ言葉を尽くして引き留めんとする父母や侍女達の声を聞き流して、彼は遂に空中に身を投げる。結果は固より墜落の死でなければならぬ。

彼はもう美しい青年になっていた。其の俤はロード・バイロンに似るものがあった。併しその形骸は直ちに消失する。後光は流星の如く天に昇り去り、地上に残るものはただ衣服と外套とリュラの琴とのみである。其処に茫然として並んで立つヘレナとファウストの耳に、今度は地底からオイフォーリオンの母を呼ぶ声が響いてくる。「おかあ様、この暗い国に僕を一人で置きちゃあいや！」とその声は言うのである。暫く間を置いて、「何のお一人で置きましょう！」という、合唱の群れの哀悼歌が響き始める。この哀悼歌は、希臘独立戦争に参加して 1824 年ミノロギ籠城中に陣没したロード・バイロンの挽歌として、オイフォーリオンの出生や経歴には直接に当て嵌まらぬ特殊性を含んでいる。故にゲーテ自身も亦この合唱が役を外れていることを認めている。併し「聖なる詩」「一番美しい星」と讃えられたオイフォーリオンを当代の人物に当てて現実化すれば、その長所と弱点とを籠めて、ゲーテはロード・バイロンを選んだであろう。従って此処の「役外れ」は一般的なものを特殊化した点にあるのみで、両者の間に矛盾があるわけではないのである。ゲーテは『ファウスト』という「甚だ真面目な戯謔」に於いては、他の箇所にも於いても処々に、その程度の自由を自ら許している。

哀悼歌がやむと共に、前の三人組の出場以来絶えず舞台に伴奏して来た音楽も亦全く休止する。古典的と浪漫的との対照と融和の問題も此処で主要な結論に到達したと見る事が出来るであろう。ヘレナは「福と美との末永く一緒になっていられぬ」ことを歎いて、しみじみと別れを告げる。そうして身をファウストの腕に投ずると、彼女の形骸も亦消え失せて、ただ衣と面紗(めんしゃ)とのみが彼の腕の中に残るのである。

かくて母子のこの世に残した二組の衣装が舞台の上にある。フォルキュアスはこの二組の衣装について、云わば遺物の意義の両面を明らかにする。彼女は先ずファウストに、ヘレナの遺物をしっかり持って手放さぬように勧説する。ヘレナと愛に於いて一緒になった男に対しては、「着物だって神のもの」なのである。「それはあらゆる卑俗なものを超脱して速やかに彼を瀕気(こうき)の中に連れて行く」力を持っているのである。ファウストはヘレナを経ることによって一段階を昇った。「ヘレナの衣は散じて雲となり、ファウストを包みて空に騰(あが)らしめ、彼と共に漂い去」って新しい生活にこれを運んでいく。

併し死者との間に精神の通いなき者にとっては、遺物は「衣装貸し」の資本に過ぎない。フォルキュアスは、次にオイフォーリオンの遺物を取り上げ、自分の白(せりふ)に特殊の強調を置こうとするかのように、今度は前舞台に進み出て、遺物を高くさし上げて、見物席に呼びかける---焔の消えたのは聊(いささ)かも惜しくはない、衣装を取り留めて、これを貸衣装に出して「詩人に免許を遣ったり、組合や手職の睨み合いを煽ったりする」事が出来ればそれで沢山だというのである。この場に於いてはただ忠実なばあやとして行動して来たフォルキュアス・メフィストは、此処に至って漸くその本性を遊ばせるようになった。それと同時に彼女は全く幕切れまで口を緘(か)んで、「前舞台にて一つの柱のもとに着座し」たままに、其の後の舞台の傍観者として腰を据え込む。

かくて主要人物は悉く動作圏外に消失した。残るはパンタリスを先導する侍女の群れのみである。パンタリスはその女主人公のあとを追うて陰府に降ろうとする。「ただ功ばかりではなく、信実も亦我々の人格を長く持たせる」。ヘレナに対する忠誠が、彼女を陰府に於いて不滅にするのである。併し軽い浮かれ調子の侍女達は、その人格を捨ててただ日光のものと生々した流動の力に融けてしまうことを選び取る。彼等は四大に帰して、自然の作用の補助者として地上に残るのである。かくて四部に別れた合唱の一つ一つに如何なる名を附するかは、註釈家によって相異なるが、トレンデレンブルクのようにこれを地水火風に配するのが、全篇の結構に最もよく適応するであろう。第一部は「生の泉を根を伝って枝の方へ上がらせ」ることによって、地の精となる、その力は特に木の成長によって示されるのである、第二部は音を伝える風の精である、それは特に巖に凭(よ)る罌(こだま)として描き出される。それから第三部は固より水の精、第四部は葡萄を熟させる太陽の光として火の精に属する。併し前の三つの分節に対応するものとしては、第四部は「わけても日の神に祈りを捧げる」(10・015)の句で終わらなければならぬ。第一部の七句を除けば他の分節は共に六句であり、第四部も亦六句で意味が区切られるからである。

然らばこの地水火風の自然力の讚美の後に、猶火の精が歌い続けるバックスとバックス祭の描写は何を意味するか？トレンデレンブルクはこの問題を提出して、それは希臘神話の精神に於いて神事として行われるバックス祭を、裏からもじめる皮肉を以て貫かれていることを発見する。そうして其処に「メフィストが背後から支配している」意味を読もうとする。兎に角、この間に一つの転調があり、「意気地なしのバックス様」の行状と行事とが、自然の恵みの悪用として描かれていることは争い難いであろう。この合唱で幕が下ると共に、前舞台にいたフォルキュアスは巨人のように立ち上がって、悲劇履(ひげきくつ)(コツルン)を脱ぎ捨てて、仮面と面紗とを背後に搔い遣って、メフィスト一フェレスの正体を現ずる。そうして必要ある場合には、後序を述べてこの曲を註釈せよと作者は指定しているのである。

第四幕

舞台は再び独逸の地に帰って、高山の稜角をなせる巖の絶頂に、ファウストは雲中から現れて出る。彼を乗せて来た雲はゆっくりと動いて東天に漂って、ユーノカレーダか、はたヘレーナかと思われるような姿を取るが、やがてその姿も崩れて、ただ夕焼けの光に染まって空に鎮(しずま)る。ファウストは暫くこれを見守っていたが、別に又彼の身边を繞(めぐ)っていた明るい霧の帯が「軽々と、たゆたいながら、次第に高く昇って来て一つに纏まる」ことを発見する。そうしてその姿が早き日の恋の相手グレーチヒェンに似寄っているままに、あの頃の清新な純浄な感情が、彼の心の底から湧き上がって来る。その懐かしい形は「魂の美」のように瀨気(こうき)の中へ立ち昇って、而もヘレナの影を映したあの雲のように解けてしまいはしない。それは彼の「内心の中の最善の物をあとに率(ひき)いる」のである。かくてヘレナのあとにグレーチヒェンが又蘇(よみがえ)る。これはファウストの新しい立場を示すと共に、又遙かに最後の昇天の場と呼応するものである。

其処にメフィストが彼の後を追うて又雲中から降り立って、暫くこの巖石の成立に関する議論が兩人の間に交換される。ファウストの結論は、メフィストの爆発論は「悪魔が自然をどう見るか」を示す点に於いて興味があるというのである。後者は固よりこんな問題に長く拘泥している量見はない。話頭を転じて持ち出すのは、ファウストがこの地上に於いて何をなさんとするかである。権勢？否。享樂？否。月に憑かれた狂者となって天上に飛び上がることも亦ファウストの欲するところではない。ファウストの願いは此の地上に於いて「大事業を成す」ことである。では名声を博するのが望みであるか？このメフィストの問いに対して、ファウストは一気にこれをはね付ける――「君主となるのだ、自領を持つのだ！事業が一切だ、名声は空だ」。メフィストはその「反撥的な、えがらっぽい、鋭い性質」の故に、ファウストのい言う事業と名声との差別を理解し得ない。併し彼はそれはそれとして放置しておいて、兎に角ファウストの「出来心の範囲」を聞いて、自分の打つべき手を案出しようとする。

ファウストは希臘から獨逸に飛來する途上に、一つの問題を見つけて來た、その動機となった現象は、メフィストが「もう十萬年前から知っている」ことで、而も其処に何の問題をも発見し得なかつたところである。その現象とは何であるか。それは海波の寄せては返し、寄せては返すのみで、そのあとに建設的な仕事を「何一つ仕遂げては居らぬ」ことである。この「恣(ほしいまま)なる四大の無目的な力」の横行を見て、ファウストは絶望に陥るほどの憤激を感ずる。「威張っている海を岸から追っ払い、湿っぽい土地の境界を狭めて、波を沖遠く我と我が身の中に押し籠め」、沿岸の面積を人生に用ある土地とすること---これこそファウストの今熱情を注いで計画しようとする事業である。彼はこの事業に対する助力をメフィストに求める。

其処に下の方から太鼓と軍樂とが響いて來る。メフィストの伝聞して來たところによれば、第一幕で我々の熟知するカイザーに対して反逆が蜂起し、今兩軍が決戦を試みんとしつつあるところである。事態を此処に導いたのは、カイザーが「政治と享樂とは旨く両立し得るもの」と信じてそれを実行したところから來る。ファウストがこれを評して「大變な間違いだ。命令を職分とする人は、命令そのものに福祉を感じなければならぬ。胸には高遠な志が満ちていて、而も彼の欲するところは、誰一人それを測知してはならぬ。最も忠誠な臣下の耳に響いたことが実行されると滿天下瞠目する。そんな風にして始めて、彼はいつでも至高者であり、最大の權威なのだ---享樂は人を賤(いや)しくする」というと、「あの人はそうじゃないです！享樂しましたな、而もすばらしく！」とメフィストは答える。かくて「命令そのものに福祉を感ずる」ことを知らぬ命令者の下に、それでなくても自然の勢いとして發生しつつあつた無政府状態が益々その横行を恣(ほしいまま)にする。各人も各階級も直接行動によってその主張を貫徹せんとする。押し込んで來る者に対抗するものは唯各人の自衛權である。かくて到る処に行わるる死闘、殺戮、掠奪---併し此の状態にいて人々は必ずしも不満ではなかつた。それは「みんなが随分大胆不敵になり」、「銘々勝手に通用することも出来れば、通用しようとする、極低い者でも充分一人前で通つた」からである。でもおしまいに「身分のある連中がこれではあまりにひどいと思つた」。

君主の義務は我々に平安を与えるところにある。カイザーはそれが出来もせねばする気もない。故に我々は新帝を選んで「平和と正義とが相嫁ぐ」世界を造つて貰わなければならぬ---こういう主張を旗印にして反逆が蜂起した。坊主が自分自身の「便々たる腹を安全にする」ためにこれを煽動した。そうして猖獗を極めるようになった叛軍(はんぐん)とカイザーのとの間に、今決戦が行われんとしつつあるのである。メフィストはこの機会を利用してカイザーの勝利を助け、その功によって際涯のない海岸を所領に請い受けるようにファウストに勧告する。前山を越えて進み出でて、谷間の陣營の配置を望めば、官軍の陣地は旨くとられている様子である。ただファウストは自ら上將軍となつて「丸で知らないことの指図をする」ことを躊躇する。併しメフィストは「幕僚に世話をさせれば元帥は安全なものだ」と言つてこれを励まし、予(かね)て用意をしてあつた「奥山に住む原人勢」を連れ出して來る。年若き喧嘩坊、中年の即取(はやとり)坊、老年の堅持(かたもち)坊。これ等の者を従えて彼等は打ち連れて山を降り行くのである。

端山の上にて

陣營を見卸す端山の上には、カイザーの天幕が開帳せられて、上將軍と親衛兵とを従えつつカイザー自身が形勢を展望しつつある。カイザーには、全軍を谷間に密集して退却させて「半ば遁走ともいふべき回避」によって新陣營を整えたことが、卑怯らしくて面白く思われないが、上將軍は我が軍の布陣を指顧しつつカイザーに形勢の有利なるを説く。我が軍の右翼は波状をなす緩傾斜の台地に拠っている。それは守るに易く、攻むるに難い地勢である。中央は平坦な牧野に方陣が集團をなして、槍を空中にきらめかしながら敵軍を中央突破すべき機会を覗(うかが)っている。そうして左翼は峻しい岩山に拠つて隘路を防護している。賊軍はこれに衝き当たつて摧(くだ)けるであろう。其処に、前に派遣してあつた第一第二の密使が歸來して、外藩の諸侯が口に忠誠を誓うのみで援

兵を送る気なく、叛軍は偽の宣伝によって群衆の心を掴みつつあることを報告するが、流石に高貴の血を持つカイザーは、今や危険に臨んで始めて全身の勇気の振るい立つことを感じて、此れ等の不利なる報告を受けても悲観することなく、僭帝に対して挑戦の使いを派遣して勝敗を一戦に決しようとする。

此処に武装せるファウストが前場に出た三人の勇士と共に登場する。彼の自ら名乗るところによれば、彼等は自然の秘密に通ずる山間の民で、嘗てカイザーが神聖羅馬帝国皇帝戴冠の最初の恩赦に、焚殺(ふんさつ)の刑から放免して遣ったノルチャの魔術師の委託によって、御味方に遣せ参じた者共なのである。カイザーはその好意を深謝するが、自力を以て賊軍を粉碎する覚悟を力説して、表面上その援助を断る。併しずるずるにファウストの加勢を受納し、且つ期待するようになって行くのである。

挑戦の使者は賊の嘲笑を受けて帰って来る。併し使者を追い帰した敵はそのあとを追うて進軍してくる。愈々戦いは始まらなくてはならぬ。ファウストは正に攻勢に出ずべき時期であることを進言する。皇帝は責任者たる上將軍に指揮を委ねる、上將軍は命令する。右翼と中央軍との進撃は既に始まった。ファウストは喧嘩坊を右翼に、即取(はやとり)坊を中央に従軍させることの許可を請願する。即取坊にはその情婦速得(はやえ)さえ寄り添うて出る。そうして彼等がそれぞれに退場したあとで、上將軍は左翼の隘路に敵襲が猛烈に押し迫りつつあることに注目する。危機は正にその方面にあるらしいのである。ファウストは堅持(かたもち)坊に目配せしてこの方面の加勢に赴(おもむ)かしめる。

其処にメフィストが来たり加わって、戦争は甚だ魔法臭く発展する。武器庫の中で枝癢を嘆じていた古武具は、今「悪魔小僧」どもをその殻の中にもぐり込ませて、左翼に出現する。そうして「味方のうしろに石垣を築く」。右翼では喧嘩坊が頭抜けて大きく見え、彼の一本の腕を振り上げると、それが十二本も暴れているように見える。中央では、味方の方陣のきらめく槍の穂先に小さい焰が忙しく踊っているのが見える。空には「架空の鳥」グライフが驚(おし)を襲撃して、僭帝が本物のカイザーに敗れ去るが如くに墜落する。凡ては官軍の吉兆を示して、右翼と中央とは既に勝ち色の著しいものがある。

ただ危ないのは左翼である。敵は岩から岩と奪取して將に頂に及ぼうとしている。そうしてメフィストの前立なる二羽鴉は左翼の悲報を伝えて惶(あわただ)しく飛来する。上將軍は悲観して指揮杖を返した。カイザーは責任をファウスト達に転嫁して、杖を授けることなしに頹勢の挽回を命ずる。魔法の力を拒みつつ利用して、善果があれば自らその功に居り、結果が悪ければ責任をこれに帰してその收拾を命ずる王者や上将の身勝手は、メフィストの百も承知しているところである。彼はこの絶望せる二人を現場から追い払って結局実権を自分達的手中に握り、茲に最後の勝利を占(し)むべき手配を直ちに実行に移すのである。先ず二羽鴉を水精の許に遣(つかわ)して、水の仮象を借りて来させる。それは実態なき仮象であるが、人間の眼には真実の水のように見えて、勝ち誇った敵軍は不意に襲いかかってくる山水(やまみず)の猛烈な勢いに周章狼狽する。更に鴉どもを小人の鍛冶屋に派して火を借りて来て、藪の中に稻妻を閃かせ、湿った土の上に隕星を爆発させると、敵軍は目眩(くら)めき、膽(きも)が潰れる。それに前から待ち構えていた古武具が「親譲りの党派根性が癖になって、宥和なんぞは思いも寄らぬ」頑強さを以て「がたがたかちやかちや不思議な、怪しい音をさせ」て叛軍を威嚇する。かくて勝利は遂に官軍に帰して、「奏楽座なる戦鬪の擬音、遂に晴れやかなる軍歌風に移行す」るのである。

僭帝の天幕

敗走せる敵の本拠に第一に乗り込んで居るものは、即取(はやとり)速得(はやえ)の狎れ合いの男女だった。彼等は當中に黄金や器什を分捕して、これを咎める親衛兵に向かって、「体を売り物に出して働いた」者の「分捕の割り前を貰って行く」権利を主張す

る。戦争に於いては、「正直」とは「徴発」を意味する。商売上の挨拶は「こっちへよこせ！」ということであるというのである。併し親衛兵等は「カイザーの軍にはそんなことは向かん」と叱責する。そうして即取坊は「此処では俺達は喜ばれるお客じゃないや」と云って退場する。あとに残った衛兵達が今日の軍の不思議を語り合っている処に、カイザーは四人の諸侯を従えて登場する。親衛兵達はこれと同時に退場して、僭帝の天幕の中で直ちに戦後の行賞と任命とが行われるのである。

カイザーはこの内乱の体験によってどれほど賢くなったか？彼は序幕のそれとどれほど違った者となったか？第四幕の彼を序幕のそれと別人になったように見て、これをカール・アウグストと比較すべきほどまでに見上げようとする解釈に、私は賛成しない。成程、彼はこの危局によって始めて「わしはカイザーだ」という自覚を得た。本当に危険というものに直面して、独力を以て英雄の業を遂げようという意気を感じた。併し彼はただそれを感じたのみである。云わば「仮装舞踏会」と「遊園」の場に於いても既に片鱗を見せていた危険の愛と事業欲とが、此処にもう一步を進めた程度で繰り返されたのみである。この感じの持続性と実行性とに於いては、彼は依然として王者の位にふさわしからぬ薄弱者流に過ぎぬのである。魔法の援助を斥ける言葉は、危機が来れば責任を魔法に転嫁しようとする態度によって裏切られる。そうして勝利を得た今になって、彼は再び魔法の参加を偶然に帰して、「結局味方は自分だけで自分の為に戦ったのだ」と口幅ったい広言を吐くのである。彼は又「経験の眼を自らの胸に振り向け」、「刹那々々の重さ」を尊重することを悟ったような物言いをする。併し「自らの胸」に依然として享樂が巢喰っていることは、表向きに----恐らくは又誠実に----一国の大事を取り賄なおうとする今、宴会のことに頭を向けるようなことは忌避しようとするが、自然の成り行きは結局飲食のことに帰着するところを見ても明らかであるであろう。彼はこの事を「祝宴も宜しかろう！それも愉快に仕事に着手する励みになるからな」ぐらいのところで見遣(のが)してしまうのである。そうして「刹那々々の重さ」は、結局この内乱を激発したと同じ政治的形態に復帰するような取極めをするために用い尽くされる。

四人の諸侯と宰相兼大僧正との合計五人に付与される特権は莫大である。領地の加増、継承や買入れや交換による領地拡張権、裁判の結審権、採鋳製塩鑄貨幣権、そうして最後に選帝権----これ等の殆ど無際涯な委譲によってカイザーの権威に藩屏(はんぺい)を築こうとする方針が、如何に反対の結果を生ずるかは、今時の内乱の与える最大の教訓でなければならぬ。併しカイザーは戦勝の「刹那」の嬉しまぎれに、此れ等の特権を気軽に授与してしまうのである。そうして当時の帝国を支配している現実の勢いの流れが、この薄弱なカイザーの刃向かうを得るような生優しいものでなかったことは、最後の、大僧正との問答によって明示される。任命と恩賞がすんで四諸侯が立ち去った後、宰相兼大僧正の「宰相は立ち去って僧正は居残る」。彼はカイザーが「魔王と結託して」今時の戦争に勝利を得たことを責めて、これを脅すに法王の破門を以てする。そうしてその「痛悔」の印に、彼の大本營を置いて悪霊の来援を得た丘陵一帯の地を悉く教会に奉獻することを求める。そうして其処には壮大な会堂が新築せられなければならぬ。カイザーは同意する、「境界は手盛りの尺度でお前が極めてくれい」、「寄進の形式はお前が作って持って来れば余は喜んでそれに親署するであろう」。これだけの言質をとって大僧正は一旦立ち去ろうとする、併し出口で振り返って又要求を追加する----会堂の建築費として戦利品の黄金の幾分の割与、会堂の維持管理費として土地の物成の全部の奉獻。僧正はこれだけを云い放してカイザーの返事を待たずに退場する。カイザーは「あの面憎い魔法遣い奴がわしにえらい損をさせおったわ」と独語する。

ああ、其処に大僧正が「再び返り来たりて最も恭しく低頭し」た。それは舞台の背後で行われたファウストの埋め立て地の許可に就いて、まだせびって置くべきものが残って居たからである。あの悪評ある男は破門されるであろう、若しお上はその土地に課すべき諸税を教会に御下渡しにならなかつたらば。カイザーは「その土地はまだないのじゃよ、海の中に広々と隠れておるのじゃよ」と云う。大僧正は「権利と忍耐とを持って居る者には、時節も亦遣って参ります」と答える。「この分だとわしは近々国中をみんな譲ってやらなくてはなるまいなあ」というカイザーの幕切れの嘆声は、彼を締め絡

む力の根強さは、凡庸の君主の能く脱却し得るところではないことを示している。我々はこのカイザーに於いて、新しい生活と世界との予約を発見することが出来ない。彼の前途には泥沼を出でて又泥沼に踏み込むべき運命が待ち設けている。カイザーは所詮、事業の問題についてファウストと対蹠の位置に立つ者として、超然たるイロニーを以て作者は彼を取り扱っているらしい。そうして第五幕に入って此の人の対蹠者としてファウストは登場するのである。

第五幕 打ち開けたる土地

我々は一人の旅人によってファウストの新領土に導かれる。彼は昔この海岸で難船して、フィレモンとバウキスという善良な夫婦によって救助された人である。彼は、長い長い旅の末に、菩提樹の老樹を目当てに再びこの懐かしい土地を音信れる。そうしてあの老夫婦が猶健在で、互いに劬(いたわ)りながら森陰の小舎に住んでいることを発見する。旅人の心は感謝と追憶で一杯である。併し暴風に狂ったあの時の海の名残を見ようとして砂丘の上に出ると、彼は光景の変化の激しさに茫然とする。眼前に展開するものは予期してきた青海原の波又波ではなくて、牧場や草地や村や森やである。ただずっと遠くの方を、夕の泊まりを求めて這っていく幾つかの帆と、水平線を限る一筋の青い縁(へり)とによって、海の所在を知るのみである。バウキスは花の咲いている小庭に食卓を出して、客あしらいよく食物を勧めようとする。併し旅人は好意の食卓に着いても、感慨が胸に充ちてただ黙然としている。そうしてこの人の前に述べられる老夫婦交代の物語によって、我々はファウストの埋立工事の経緯を知るのである。

フィレモンは神を信ずると共に、又カイザーと人とを信ずる。「カイザー様が罪になるようなことをなさるものかね？あの方があの人にこの海岸をお授けになさったのだよ」。故にこの新領土も亦彼にとっては、「賢い殿様方の御家来衆が、溝を掘ったり、堤(つつみ)を築いたり、海の権(ちから)を狭めて、代わって主人となろうとなされた」結果である。併しバウキスは、神には頼るが人は信じない。ファウストは「神様を恐れぬ人」である。彼の事業の迅速なる進行には、暗き魔法があり、人身御供(ひとみごくう)の流血がある。而もこの人はこの広い埋立地だけでは満足せずに、自分達の小屋や木立をも欲しがっている。彼女はこの事業に対する不信と、追立を喰らおうとしている者の憤懣とを以て、能弁にこういう経過を物語る。フィレモンが、その代わりに立派な代地の提供があることを物語っても、バウキスは草分けの故地を離れて、埋立地を信用して其処に引き移るようなことをせぬように夫に警告する。フィレモンは他の二人を促して、木蔭の丘にある御堂へ行って、入り日の名残を見送って、鐘を鳴らして跪いてお祈りをして、昔ながらの神様にお頼りしましょうと立ち上がる。そうして何気なきこの鐘の音こそファウストを堪え難く思わせるものなのである。

官 殿

一方埋立地の、直線に掘り割られた大運河に沿う遊苑に於いては、最早極めて高齢に達せるファウストが、沈思しつつ漫歩している。そうして自ら成就せる大事業にも猶満足し得ぬこの人と対照をなしつつ、望楼上のリュンコイスは、この新しき国の外部的繁栄を讚美している。其処に丁度丘の方から響く鐘の音が聞こえてきて、ファウストは又新しき神経の苛立ちを感じずにはいられない。それは眼前に無限の自領を見つつ、背後から、すぐ近くに、彼の意のままにならぬ邪魔物があることを意識させられるからである。このファウストの憂鬱は、折柄帰着したメフィスト一行の船が多く掠奪せる珍宝を運んで来てこれを彼の眼前に積み上げたとき、慰められずに寧ろ益々深められる。二艘で出かけて二十艘にして帰って来るには、固より「戦争と貿易と海賊と、こいつは三位一体で」あることを主張する悪魔の所行がなければならぬ。メフィストの部下がこの「功」によって期待してきたものは、これを無条件に承認し嘉賞するファウストの褒め言葉である、労に報いる平等の分け前である、慰労の宴会責である。併しファウストはこの「王者にふさわしい宝」を見ても、「臭い物を貰ったような、いやな顔」をしている。そうして彼の頭を占領するものは、ただ砂丘の上の老人夫婦を立ち退かせて、其処

の菩提樹の上に彼の全領土を展望すべき櫓(やぐら)を構えることが出来ぬ苦しさである。「俺の為し遂げた一切の物を眺め、人間の精神が作った傑作を一目で大観したい」願いが、あの皺くちやの老人共と、彼等のちっぽけな小舎と、腐れかかった会堂と、これを覆うて茂る菩提樹とによって妨げられている、そうしてこの障害の意識を彼の耳に叩き込もうとするかのように、あの鐘がびいんと鳴りぼうんと鳴り出すとき、彼は物狂おしくなるのである。彼は老人夫婦に対して誠実に正義を行わんことを欲する。併し「反抗と片意地とが、どんなに素晴らしい収穫にも邪魔を入れるので、それが深い、恐ろしい苦みとなって、正義を念ずる心さえ倦み疲れずには居られない」ような状態に、彼は追い詰められているのである。彼はこの悩みをメフィストに打ち明ける。メフィストは老人夫婦を代地に移すことを気軽に引き受ける。併し今しがた掠奪の富を山と積んで帰って来たメフィスト、「何を掴むかが問題だ、どうして取るかは問うに足らぬ」というメフィストは、「正義を念ずる」ファウストの使者としては甚だ怪しいものである。

深 夜

果然、望楼の上で、世界の美と、世界の美を見る自分の眼とを朗らかに讚美していたリュンコイスの歌が、老人達の小舎の火事を告げる悲歎の調べに変わった。始めには小屋から燃え立つ火が「菩提樹の二重の闇を貫いて」見える。併し火は更にこの樹の枝や幹にも炎を移して、その頂までもこれに攫(つか)まれてしまう。そうして小さい御堂さえ落ち重なる枝の重みで潰れてしまうのである。併しこの火事に見入っているのは楼上のリュンコイスだけではなかった。ファウストも亦宮殿の露台に出て砂丘に対していた。彼はかくて彼の「邪魔物」が一举にして滅びたことを冷ややかに喜んでいられる男ではない。「性急に過ぎた業が心の奥で俺を悩ます」ことを彼は感じている。併し差し当たり彼はこの悩みに深入りする代わりに、この偶然によって生すべき新事態を明るい色に描き出す方に急いで行く。焼けた菩提樹は痛ましいが、その代わりに「果てしなき展望を恣(ほしいまま)にする」一つの新しき望楼が建つ。小舎を失った老人夫婦は「心の寛(ひろ)いいたわりの情に感じて」、新しい家に余生を楽しむであろう。併しこの果敢ない自慰を、すぐに、メフィスト及び其の部下の齎(もたら)す注進が破壊する。無理に押し込んで行く彼等の勢いに驚いて、老人夫婦は喪心して倒死する。旅人が刃向かうのを彼等はのしてしまふ。そうして鬭争の間に燃え広がった火事はすぐに三人を火葬してしまつたというのである。ファウストは交換の命令を受けて強奪を実行しようとした彼等の行為を呪う。これを王者の身勝手と解するメフィストの言葉は、半ばファウストの意識の底にある責任を衝くことによって、彼を共犯者の中に抱き込むだけの効果はあつたであろう。彼等の立ち去つたあとに、ファウストは一人露台の上に残つて、下火になつて行く火事を見守っている。そうして衰え行く火勢に伴う寂しさのうちに、何物かの影が灰色に漂い寄つて来ることを感ずる。

真 夜 中

其処に登場するのは四人の灰色の女である。彼女達の名は「欠乏」、「負い目」、「憂い」、「辛苦」。それは老夫婦の火葬の薪となつた焼け跡の煙から抜け出でて、ファウストの方へ忍び寄つて来るものである。併しファウストは「福人」である、換言すれば物資と精神とに於いて共に豊かな人である。この人の前では「欠乏」は影なり、「辛苦」は顧慮の外に置かれる。そうして剛気で権力のある人には「負い目」さえ、物質的・道徳的の両者に互つて彼が償わなければならぬ負債さえ、跳ね返される。これは無も同前のものとなって、彼を苦しめる力とはなり得ないのである。併し「憂い」は---それは貧富貴賤賢愚の差別なく、凡そ生活の停滞、生活意志の弛緩があるところには、何処にもその姿を現することが出来る。彼女は鍵穴から室内に忍び込むことに成功する。そうして他の姉妹達が踵を接して姿を消す背後から、兄弟なる「死苦」の近づいて来る影が、闇の奥に遠く見られるのである。

かくてファウストは再び「憂い」と面々相對することになった。再び---というのは、彼は既に『第一部』でも、序幕の「夜」の場の第二独白に於いて「深き心の底に巣くい、

其処に密かなる痛みを蒔いて、安気なく身をゆすり、悦びをも静けさをも障礙する」(644-6) 憂いに面接して、「起こりもせぬことのために常に慄えわななき失せもせぬものをいつでも哭(こく)せなくてはならぬ」人間の運命を歎いて来たからである。今、ファウストは最も憂いの来訪を受けるにふさわしい状態にいる。彼が現に心身を打ち込んでいる大事業も、過去からひいて来た悪魔との腐れ縁によって、その純浄を汚されつつある。メフィストはこの新しい海国の権勢を笠に着て、海上に於いては掠奪の富を獵(か)って来る。背後の砂丘では老人夫婦を殺して、ファウストの「正義を念ずる心」の裏をかいて、彼の性急な渴望の結果をつきつけて見せる。そうして過去を顧みれば、『第二部』に於いても、寧ろ『第二部』に於いて益々、彼の重要な生活段階は悉く魔法の助けを藉(か)りて始めて成り得たのである。宮廷への最初の見参、ヘレナの獲得、官軍の勝利と新しい所領の経営----凡ては魔法の臭いに満ちている。云わば『第二部』に於けるメフィストの戦術は、ファウストの成熟につれて、目的の定立と実現の計画とに於いてはファウスト自身の意志に任せて、自分は純粹に奉仕する者のような顔をしながら、ファウストの行動経営の一切を取り捲くに魔法の空気を以てして、遠巻きに彼を窒息させようとしているとも云い得るであろう。固よりこれ等の場合には、魔法や幻術は、メフィストがファウストの為に利用して他人を煙に捲く手段である。併し彼のために製造される毒瓦斯(ガス)は彼自身の鼻や咽(のど)にも沁みなければならぬ。かくて彼はいつの間にか「怪異が空中に満ち満ちて」、「姿が見える、前兆がある、警報が来る」不安な世界に、「びく付きながら一人で立っている」状態に自らも陥っていたのである。

魔法や怪異の信仰は外力の干渉を信ずることである。併しこの場合人は外力に信頼して、安んじてこれと協調するのではない。それは何時、如何に、黒い怪しい姿を現して彼の途を遮(さえぎ)るかも知れぬ力として、彼の未来への意志を曇らせるのである。若しくは未来の懸念を現在の充実に置き換えるのである。ファウストは今弱り目に立っている。縦令(たとい)老夫婦を殺した責任は、メフィストとその部下とに「分けて背負わせ」ることは出来たにもせよ、「早まって吩咐(いいつ)けた」ことだけは彼も認めざるを得なかった。彼はその良心というよりは寧ろその本姓の底に於いて、自ら過てることの悔(く)いを感じている。そうしてこの弱り目に祟り目が乗じて音信れることを恐れている。この際彼が最も強く感ずるものは、この弱り目を反撥して「自然の前に男一匹として立つ」憧憬である。魂の「自由な世界」を獲得することである。従って彼の「行路から魔法を遠のけて、呪文というものを綺麗さっぱりと忘れたい」願いが最も痛切に彼に襲いかかって来る。併しこの願いそのものの底に、祟り目を恐れる弱り目が巣くっている以上、彼は憂いの来訪をどうしても拒むわけに行かぬ。必要なのは再び彼の魂を振起して、憂いと対決し、憂いを跳ね退けることである。ファウストは実際それを敢行する。そうして彼の魂には最後の飛躍が生ずる。

この対決に於いて、憂いが「潜行しつつ偉大な」その力を主張する根拠は何処にあるか。それは暗く曇ったものを一切に混入せしむるところにある。何事からも明快強健な現在の充実を奪って、それを狐疑、不決断、不徹底に墮せしめるところにある。憂いの捕虜となったものは、福禍共にふさぎの虫の種となって「満ち足らいながら餓えに悩む」。歓喜も心労も明日に延期して「ひたすら未来を待ち受けるのみで、決して仕上げが出来はしない」。「窒息もせぬが活気もなく、絶望もせぬが専念もせぬ」。「半端な眠り、ぱっとせぬ休養」が彼を最後の疲労に誘って行く。併しファウストはこれに対抗するためにその驀進(ばくしん)してやまぬ暴風の性を以てする。意欲の充実、脱離の勇猛、断念の明快、それに地上の現在に集中して、如何なる予感の中にも迷いこまぬ生活力の濃密。「あの世への展望は、人間業で出来ることではない」というのは、あの世の否定ではなくて、人間の一つの諦念である。併しこの一つの諦念が積極的な力となって「眩しそうに眼を彼方へ向けて、雲の上に自分に似た者を空想し」たり、「永遠の境にふらふら迷い込ん」だりする馬鹿の仲間から彼を脱却させる。苦悩、幸福、若しくは彼の道に覗いて出る「妖怪」----凡てをその去来するに任せて彼は只管(ひたすら)に前進するのである。弛緩と罅隙(こげき)となき生の廻転が、近づき寄る憂いを跳ね返してしまう。

此処の白(せりふ)はファウストの状態の平叙ではない。彼の魂の新しい振起を示すも

のである。そして憂いはこの振起せる魂に施すべき術なく、ただ息を吹きかけてこの老人の肉眼の明を奪ったのみで、空しく退散する。盲者となったファウストは改めて内に輝く光の存在を感じつつ、夜半にも関わらず、家隷に命じて仕事を急がせる。この命令を下す彼は依然として、高遠の志と利民の念とに燃ゆる偉大なる専制君主である。主人は「千本の手を使う一つの頭」である。故に「主人の言葉こそ何よりも重い」ものでなければならぬ。奴隷は「厳格な規律と早速の勤勉」を以てただ命これ奉じつつ大目的の遂行を助けなければならぬ。新しい国はこの精神を以て経営されて来たのである。

宮殿の大いなる前庭

併し四人姉妹のあとにちらりと姿を見せた五人目の「死」がそろそろ忍び寄って来る。メフィストは真夜中の松明の光を便りに、骸骨どもにファウストの墓を掘らせている。併しファウストはその鋤の音を家隷の勤労の音と聞いて、探り手に宮殿の中から庭に出て来る。彼の頭脳を充たすものは、ただ計画せる大事業の最後の完成を急ぐ以外、他に何物もない。これに対してメフィストは、ファウストの死が目前に迫り、彼の熱中せる干拓の業さえ「睡魔のネプツーン達に大盤振る舞いの用意をしている」に過ぎぬことを囁いて、ファウストの一生の空しさを嘲笑する。併しファウストはメフィストの傍白に耳を汚されることなく、飛躍せる最後の夢想を開陳して、それと共に倒れて死んでしまう。---この夢想は、事業の迅速なる進行に関心せる、従来ファウストの立場を超越して、無限の前途に開かれ来るべき、無限の展望を意味する新しき見地である。此処に至れば、彼は最早如何なる意味の専制主義者でもない。彼は導者である、民衆の組織者である。その民衆は「危険に取り巻かれて」協同してその国を防護しながら、日毎にその生活と自由とを戦い取って行く「勇健な」人々でなくてはならぬ。そして彼は彼等のために、「安全でなくとも働いて自由に住まれるような」土地を拓(ひら)いてやっているのである。「自由な土地の上に自由な民と共に住む」---これは既に完成したものの上に安逸の生を繰り返していくことではない。彼等と手を繋いで一緒に働きつつ、無限に努力して行くことである。彼はこの無限の展望に最後の充実を托する。この予感に充たされた瞬間こそ「まあ、待て、お前は実に美しい！」と呼びかけるにふさわしい。彼はこの言葉の中に、嘗てメフィストとの契約に当たっては予想だもしなかった内容を盛り得ることを悟った。併しこの言葉は、単純に形式的に云えば、彼とメフィストとの賭の勝負を決すべき言葉である。彼は遂にこの言葉を心の底から口にし得る境地に到達した。そしてこの瞬間に神は彼に地上の死を送ったのである。

メフィストはファウストのこの「最高の瞬間」を「下らぬ、空虚な瞬間」と評する。これまで、グレーチヒェンへの愛欲や、宮廷に於ける権勢欲や、ヘレナへの憧憬や、新領土の獲得については、或側面から或程度まで理解し得た彼も、此処に来てはもうまるで理解し得ぬほどにファウストと懸絶してしまったのである。この事は、彼がこれほどまでにファウストに後れたとも云い得るであろう。ファウストの霊が完全にメフィストの手をすり脱けたとも亦云い得るであろう。併し後者は事実上彼が既にファウストを失ってしまっていることに気付かない。勝利の感情を以て彼はファウストの死骸を見下す。そしてファウストを「おしまいになって」しまったものと見て、生成と死滅とのどうどう廻りが本来の無と選ぶところなき徒労であることを指摘する。

埋 葬

死霊共の埋葬の歌で幕が上がって、メフィストはファウストの魂を攫(つか)もうと緊張して待ち構えている。彼が油断がならぬと嘆くのは、「在り来たりの慣習も、昔からの権利も、もう何一つあてにすることが出来ん」からである。既に靈魂の肉体を飛び出す時期にしてからが、昔とちがって愚図ついている。毎日毎時張り番をしても、何時？ どう？ 何処？ という奴が実に厄介な問題である。それに近頃は靈魂を悪魔の手から詐取するにも色々様々の手段が出来た。例の血書の書き付けを、見せる積もりで用意してあっても、中々大丈夫だとは申しにくい。(メフィストの自ら疑う悪魔であることが此処に最も明らかに示される。)故に彼は地獄から直角(すぐづの)の肥大鬼どもと曲角

(まがりづの)の瘦せ鬼どもとを手伝いに呼んで、序でに地獄の脛(あぎと)も持って来させる。この脛も罪人の位階勲等に依じてその種別が甚だ多いのであるが、変わり行く時勢ではそれも大してやかましくないことになるであろう。肥大鬼は肢体の下部を見張り、瘦せ鬼は虚空を絶え間なく掴んでいるように、彼は部署する。

其処に、右上の方から栄光がさして、天軍の群れが翔(かけ)ってくる。歌いつつ漂うのは「小僧とも娘っ子ともつかぬ出来損ない」である。この中間性の美は、人間の生殖を絶滅させようとしたときに悪魔の発明したものであるが、彼等の武器を奪って、そういう姿をした天使達が今此処に彼等に攻め寄せるのである。天使達は歌と共に薔薇の花片を降らせる。この散華に逢って鬼共が「屈んだりびくついたりする」のをメフィストが叱咤する。彼はこの雪片を吹き避けることを命ずるのであるが、吹けばそれは焰となって飛んで来るのである。鬼どもは「渡りもののねっとりと絡む熱」を感じ出した。歌い続けつつ天使が更に散華するままに、メフィストの陣営は敗色著しく、「悪魔ともあろう者が逆立ちをして、不細工な体でぐるぐる翻筋斗(とんぼがえり)を打って、けつから先に地獄へ墜ちて行きやがる」。ただメフィストは一人猶踏み止まって、漂い来る薔薇を払い、舞台の上に大活動が続けるのである。併し薔薇の焰が彼に触れて愛欲の火を点ずるにつれて、彼はその身のうちにその身を裏切るものを感じ出した。彼の頭が燃える、胸も肝も燃える。それは「超悪魔の火」で、「地獄の火よりもずっと痛い」のである。彼にも失恋者の苦悩がわかって来た。彼は天使達に対して情欲を起こす、「こっそりと猫じみた欲がひどく催して来る」。彼は遂に「こっちへ寄って一瞥でも恵んでくれんかい！」とその敵なる美少年を招待するまでに心を掴まれる。

「行きますとも」---天使達は回旋し来たって悉く舞台を占領し、メフィストは前舞台へ押し出される。併し彼は猶「全く以て旨そうな」天使の体付きに酔わされて夢中になって饒舌り続けて、ファウストの不死の部分の奪い去られたのにも気づかずにいるのである。彼は或いは誇り、或いは恥じる。自分の体が「ヨブのように火ぶくれだらけになったのは我ながら無気味だ」が、「悪魔の高尚な部分は助かって、色恋のお化けが皮膚だけに集まっている」に過ぎないのは、流石に血筋は争われぬ自慢の種である。併し「甲羅の生えた悪魔の癖に、」卑しい情欲や馬鹿気た色気に負けて、「たった一つの大きな宝をちょろまかされる」に至っては「面目次第もない」次第である。彼は自業自得の失敗を自認する。イロニーを以て自己を見る点に於いて彼は世界文学史上独自の地位を占めているのである。そうして天使達は先刻もうファウストの魂を載せて---「皆とも一つとなり、起ちて称(たた)えよ、風は浄められぬ、霊よ、息衝け！」と歌いつつ、天上への道を翔(かけ)りのぼっているのである。

山峡、森、巖、荒涼の地

激湍(げきたん)に臨みて、断崖と幾つかの洞窟とをなす、大樹の繁り森々たる山峡がこの最後の舞台面である。注釈者の或者はピザのカンポ・サントにある「テバイの隠者達」の壁画に頼ってこの舞台面の構成を理解しようとする。東洋に生まれた我々は群像をなせる羅漢国の或物に、此の舞台面を思い寄せることが出来るであろう。この巖壁は三段に分かたれる。最も低く、激湍の飛沫を浴びるばかりのところには、深奥の師父が居り、中間に居る天使めく師父は縦(もみ)林の梢を縫う暁の雲を見透かすほどの高みに座し、最も高き処に居るマリアを崇(あが)むる博士は、彼の頭上に穹窿をなす天空に、思いを馳せ眼を放つ日々を送っているらしい。舞台は本流のほとりと、漂いつつ昇降する法悦の師父とに始まって次第に上に移り、最後は広やかに澄み渡れる天空に於いて終わるのである。

先ず響くものは合唱と冴との歌である。法悦の師父、深奥の師父はこれに次いで共に一切が愛の顕現である自然の霊威を讃美する。苦痛は内心を錬るのである、雷火は大気を浄めて万象を育むのである。二人の師父は、この大威力の愛を身に体して、胸に久遠の星が照り、霊に澄徹の力が加わらんことを切願する。この根本気分によって準備せられた後に、劇的動作は漸く始められる。

中間の処に居る天使めく師父の眼が先ず、「漂いながらあの樅林のゆらめく髪の間を縫って来る暁の雲」に牽引される。近づいて来るままに、それは祝福せられたる童子の群れ----「両親が失って天使達の儲け物になった」夭折せる子供達の霊であることが明らかになる。師父は、「峻(けわ)しい世間の道」を知らずに済んだこれ等の「幸福者」達を自分の眼の中に招待して、これを通して、樹や巖や滝つ瀬を見ることを教えて遣るが、童子たちはこのあまりに荒く凄く光景が怖くなって、師父に暇乞いをして更に高い境へ昇って行く。彼等は「嬉しく、同胞(はらから)の輪をなして」手を繋ぎ合いつつ、山の絶嶺を周り行くのである。

又更に高き堺にあつては、メフィストに勝った前場の天使達が、「ファウストの不死なるものを担いつつ」漂って来る。「何人にもあれ、絶えず努め勤(いそし)む者を、私達は救いに導くことが出来る」、故に彼の霊は天使達の愛ある活動の対象となるに値するのである。それにファウストには上からの愛さえ加えられた、贖罪の女達の授けた薔薇の力が天使達の勝利を助けた。併し今、成熟せる方の天使達は、ファウストの「剛毅な霊の力」が下界の残り屑を掻き寄せて持っているために、これを担って昇るのが苦痛である由を訴える。この二重性を分かつのは永遠の愛のみがなし得るところである。ファウストの霊は蛹(さなぎ)の状態に於いて天上の第一歩を踏み出さなければならぬ。折りよくも其処に、先程天使めく師父の眼の中から出て嶺近く昇って来た「祝福せられたる童子達」の群れが漂い寄って来た。彼の霊は先ず手始めに此れ等の童子達の手には托せられる。彼を包んでいる「繭屑(まゆくず)」を取り去って貰うと、それはもう「美しく、大きく」なり出すのである。

此の如くに動作は次第に上に向かって動き、我々は今、「最も高き処にある、いと淨き窟にて」、マリアを崇むる博士の許に到達する。彼はこの眺めの広やかに霊の高めらるる処にいて、彼方の空を漂いつつ上に向かいて通り行く女人の群れを発見する。その真中には、星の冠を戴いた聖母マリアの姿さえ拝まれるのである。彼の歓喜に酔える讚美の間に、その群れは近づいて来て、軽い片雲のように見えるのは、マリアを取り巻く贖罪の女達であることが見わけられる。この光景が再び彼女の限りなき仁恕(じんじょ)への讚美を誘い出して、罪ある女達への思い遣りの歌として響いている間に、栄光の聖母が躬(みづか)ら天翔(あまかけ)り来て、贖罪の女達も亦従って現れる。始めには合唱、次には『ルカ伝』のマリア、サマリアの女、埃及(エジプト)のマリアの三人が順次に進み出でて、それぞれの過去と贖罪とにかけて、「ただ一たび自ら忘れしのみにて、過ちすとは予(か)ねて暁(さと)らざりし」グレーチヒェンの為に、ファウストへの、宥恕を祈願する。そうしてそのグレーチヒェンは彼女の恋人を迎える嬉しさに、栄光の聖母に「縋りまつりつつ」、嘗て地上にあつて、廊壁に沿える巷で、悲しみの聖母の御前に胸の嘆きを灑(そそ)ぎ尽くしたときと同じ韻律を以て、ファウストの未だ幼き霊に「お教え申す」ことの許可を切願するのである。彼女がもっと高い空へ昇ると、彼の霊も亦ついて昇るであろう。既に、世にあつて「学んで来た」彼の霊は、彼を托せられた祝福せられた童子達よりも、手足がもうずっと大きく伸びて来た。天上に於けるこの先の成長は量り知るべからざるものがあるであろう。この「福(さきわい)ある運命(さだめ)の道に、み恵みを思いつつ新たに生まれむため」、救いの御眼を仰ぎまつれと勧説する、マリアを崇むる博士の歌に続いて、全員が声を合わせて歌う「神秘の合唱」が響き渡る----

常なきものはみな
ただ譬喩(たとえ)なれ。
遂げ難かりしもの、
此処に円現し、
言葉を越ゆるもの、
此処に成されつ。
永遠(とわ)に女性(によしょう)なるものぞ
我等を牽き昇るなる。

無常なる物の意義はこれが不易なるものの譬喩たる処にある。不易なるものの譬喩として、あらゆる無常なる物は、メフィストの所謂「おしまい(フォールバイ)」になることは決してないのである。併し無常なるものの意義をなすイデーは、地上に於いては遂に円現することが出来ない、円現は天上のことである。天上では又、言語を超絶するものも成就される。ファウストの救いはその一例とせらるべきである。永遠に索引する原理(アフロディテとしての愛)は永遠に索引せらるる原理(エロスとしての愛)を導く。久遠に女性なる者が我等を無限に索いて昇って行くのである。(14, 4, 25 記)。

3) 『第二部』の成立

1825年2月25日は、ゲーテ家にとって来客の多い日であった。朝来『詩と真実』の第四部のために詳しい筋立てを書いていたゲーテは、次々に出現する来訪者のために日中を潰した。併し夜に入って彼は再び自分自身の時間を見出すことが出来た----「独りとなって、1775年のこと、特にファウストのことを省思」、とその日の日記に記されている。そうして自叙伝の制作に縁をひくファウストの回想が直ちに『ファウスト』そのものの詩興に蔓をのぼして、あくる26日の午前には「ファウストに着手、二三のことを考案し且つ書く」までに心機が成熟していた。その後、1831年8月27日の誕生日まで六年半の間、彼の晩年の「首要な仕事(ハウプト・ゲシェフト)」となった『第二部』の制作は、かくてその静かにして而も休止なき車輪の運転を始めたのである。それは数え年で彼の77から83までの間のことである。その翌年の3月22日には、詩人は既にこの世を去っていた。

併しこういうのは、『第二部』の成立が凡てこの六年半の時間に畳み込まれているという意味ではない。その構想の或物が『第一部』と等しく、遠く青年時代に遡っていることはいうまでもなく、或部分は実際の起稿さえ1800年前後に始められていた。第三幕の「ヘレナ」が既に1800年の初秋に書き出されていたことは、シラー・ゲーテ往復書簡によって明らかであり、最初の265句(成稿の8488-8802句に当たる)を記せる当時の草稿も亦これを証する。その他第一幕のカイザー宮廷の場、第五幕のファウストの死と埋葬の場も亦多少着手されていたことは、遺稿の断片(W. A. Par. 65-96.)によって推知することが出来る。約言すれば宮中への出現やヘレナの還魂等、ファウスト伝説に於いて既に不可欠となっている部分と、新しきイデーによって今や明瞭な姿をとり出した、ファウストの救いに関する部分とは、『第一部』の最後の仕上げと時を等しくして書き出されていたのである。かくて『第二部』の成立は、1825年から更に25年を遡って、少なくとも1800年前後まで持って行かなければならぬ。

而もゲーテの制作習慣にあっては、落筆は成熟の最後の段階である。脳裏に醗酵して次第に成形に近づくのみで、未だ何の形でも文字に托せられぬ幾年。それが僅かに簡短なプランとして書き留められるのみで、幾つかのプランの間に動揺しつつ最後の定稿に向かって成長して行く幾年。この二つの段階が、ファウストの制作に当たっては、数十年の歳月を占領する。最初の着想が半生以上に互ってその大綱を保持し、それが時々の体験によって涵養せられつつ、その具体的直感を活潑にし、感情と思想とを深化して成長を遂げて行くことは、ゲーテの天才に於いて最も驚嘆すべきところである。従って『第二部』の成立を問題とする者は、当然に書かれざる『第二部』の成長過程をも考慮に入れる必要があるのである。

1831年5月2日----ゲーテは第五幕の始めの部分、フィレモンとバウキスの挿話がほぼ完成したとき、「此れ等の場面の着想は30年以上昔のものである」とエッカーマンに語った。それは固より概数を以て語られたものであろうが、我々は前掲の断片を残している諸場の外に、この二老人の場も亦1800年頃既に彼の計画の中にあつたことを推測することが出来る。

1832年3月17日----彼の生前最後の書翰に於いて、詩人はヴィルヘルム・フォン・フンボルトへこう書いた----「ファウストの構想が、始めの部分ははっきりと、全体の

序列は詳細を欠いた姿で、若々しく私の前に浮かんでいたのは、60 余年以来のことである」と。この 60 余年も亦概数と解すべきであるが、それは初稿に始めて筆を下したであろう 1773 年に、腹案のための二三年を更に加えて遡れば、文字通りに解することを妨げないであろう。そうしてゲーテが第二部をも含めてこれを云っていることは、文章の前後を照合すれば明瞭である。従って、縦令(たとい)「詳細を欠く姿」ではあっても、第二部の荒筋も亦最初から第一部と共に醗酵を始めていたものと見なければならぬ。併しそれは完成せる第二部の諸幕各場があのような筋立てで考案されていたという意味には受け取り難い。1816 年『詩と真実』に挿入するために書かれた荒筋や、1825 年以後に書かれた幾つかのプランと断片とが、それぞれに今日の第二部の筋立てと相違して、それが此れ等の年代に入っても猶動揺と生成の途上にあつたことを示しているからである。併しその或部分----例えばヘレナの出現----が全ファウスト中彼の「最も古き着想の一つ」(An S. Boisserée : Okt., 22, 1826.)で、「全篇の最初の着想に際して直ちに、端的に規定されていた」(W. Par. 123, 2.)ことは、疑いの余地がないであろう。故に我々は『第二部』の成立史をも亦『第一部』と等しき青年時代から始めなければならぬのである。

然るにゲーテは又最後の書翰を宛てたと同じヴィルヘルム・フォン・フンボルトへ「ファウストの第二部は.....50 年以来、その目的や動機について考え抜かれ、彼此の場面が私の心に協(かな)うままに、断片的に仕上げられ、而も全体として罅隙(こげき)あるままに残されていた」(1831 年 12 月 1 日)と書き送っている。僅かに四ヶ月を隔てた 1832 年の 3 月半ばには、「60 余年以来」と書く同じ事実を、此処で「50 年以来」と称するのは何故であるか。第一に注意を要するのは、この手紙では問題が明瞭に『第二部』に限定されていることである。而もそれが「考え抜かれ.....断片的に仕上げられ」た時期に関係していることである。従ってそれは最後の手紙のように漠然として『ファウスト』の全体に関していわれた言葉とは性質を異にしていなければならぬ。然らばこの「50 年以来」という言葉は、『第二部』について或格段な時期を示すものと見ることが出来るであろうか。

1831 年末から厳密に 50 年を遡れば、それは 1782 年に相当する。1782 年は彼がヴァイマルの政治に没頭してファウストのことは殆ど忘れていた時代であつた。ゲーテがその頃に『第二部』を「考え抜き、処々を断片的に仕上げ」ていたとはどうしても受け取り得ぬところである。併しその後四年を経て、1786 年から 88 年までの伊太利旅行に際しては、彼は疑いもなくファウストの完成を心に持ち、而もこの旅行の終期には、實際その結構を「考え抜き」、詳しいプランを作り、その一部分を書き上げさえした。故に此処にいう 50 年を概数と見れば、結局我々は、伊太利旅行が『第二部』の成立に対しては格段の時期を劃したことを意味するものと、この一節を解することも出来るのである。

然らば伊太利旅行は如何なる意味で『第二部』の成立に格段の時期を劃したであろうか。茲で我々は、第一部と第二部とに通ずる問題として、ファウストの救いの動機が何時作者の頭脳中に成熟したかの疑問に触れることを余儀なくされる。細部に就いては如何なる変更があるにせよ、『第二部』の全体としての纏まりは、このイデーなしには不可能であるからである。このイデーが全体を結晶せしむべき中核となつて、『第二部』は始めて今日の如き姿をとることが出来るからである。若しファウストの救いの理念が伊太利旅行中に始めて明確となり、この理念を繞(めぐ)って、第一部も第二部も作者の頭脳中に全体として結晶過程をとりつつあつたとすれば、結晶以前に既に大部分が出来ていた『第一部』に対するよりも、これから書き出されようとする『第二部』に対して、この時期は遙かに重大な意義を持つていなければならぬ。我々はこの推測にどれだけの根拠を与えることが出来るか。

ウルフファウストにはこの救済の動機を読み出すことが出来ない----これは既に Minor (Goethes Faust. I.)や Roethe (Die Entstehung des Urfaust.)が精細な研究によって結論するところである。それはこの思想がウルフファウストに於いては不可能であるという積極

的主張とはなり得ないが、それでもそれが既に書かれた部分にもにじみ出すほどの明確な姿をとってはいなかったことだけは云い得るのである。そうしてそれが明確な姿を以て出現するのは第一部でも就中(なかんずく)「天上の序曲」である。この序曲の成形の時期に就いては異論があるが、少なくともその構想に於いては 1797---8 年に属すると見ることは九分通りまで許されるであろう。従ってこのイデーは、18 世紀末には確定していた。問題となるのはこの確定の最も早い時期である。

Burdach はその論文、"Faust und Mosis" に於いて、モーゼの生涯、特に彼の最後とファウストのそれとの比較によって、1781 年に既にファウストの地上最後の展望、死、天使と悪魔との戦い、天軍の群れによるファウストの魂の奪取等の諸場が計画されていたことを推測する。この論文がゲーテの脳裏に於けるモーゼ像の発展と、モーゼの伝説及び歴史が『ファウスト』に及ぼせる可能な影響とを明らかにせる点に於いて多くの功績があることはいうまでもないが、これによって第五幕の最後の諸場の成立年代を推定しようとするのは、明らかに行き過ぎといわなければならぬ。1781 年 6 月 21 日、フリードリヒ・ミュラー宛の書翰に於いて、ゲーテはモーゼの霊に対する大天使ミカエルと悪魔との争いの話に触れているには違いない。併しそれはゲーテのモーゼに対して持っていた持続的な興味がこの時代にも影を潜めていなかったことを証明するのみで、それだからファウストの最後に関する着想がこの時分に出来たとはいいい難いのである。そう解釈するには他の証拠が---特にゲーテ自身の証言が---必要であるが、それに役立つものは、今日の智識でいえば、全然欠けている。

Gräf の精細を極めた蒐集("Goethe über seine Dichtungen. Drama II. ") によるも、この年の前後数年はゲーテが最もファウストの制作から遠かった時代で、他人の請によって草稿を朗読した記事はあっても、これに鞅掌(おうしょう)した痕跡はまるで見当たらない。僅かにそれらしく見ようとすれば見られそうなものは、1782 年 2 月 10 日、シュタイン夫人あての書翰の一節であるが、ゲーテが公爵夫人ルイーゼの晩餐の食卓で、ヘルダーやヴィーラントや公爵の酔態を見、超然としてこれを眺めながら、「メフィストフェレスが二三の観察を私の耳に囁いて、私のプンシュ酒の味をよくすることを覚えた」というとき、全『ファウスト』中最もよくこれに適合しそうな場面は、第一部の「アウエルバッハの酒場」である。そうしてこの一場は既にウルファウストにあるもので、恐らくシュタイン夫人がゲーテの朗読で知っている筈のものである。従ってこれを以て当時『ファウスト』の孰れかの部分の制作に従事していたという証拠にするわけには行かない。況(ま)してそれが第二部の最後の場面であり、ファウストの救いに関するものであるというような根拠は何処にもないのである。その根拠さえ発見することが出来たら、ブルダッハの推測は、前出フンボルトへの書翰の「50 年前」にも厳密に当て嵌まって甚だ好都合なのであるが、不幸にして我々はこれを見出すことが出来ないのである。これに反して、これを伊太利旅行中の或時期に置くことは、「50 年前」と称するゲーテ自身の証言があり、当時彼がファウストの完成を問題としていたという動かすべからざる事実があり---而も亦大胆不敵な不可能の追究者ファウストを救いに導くことは、当時の彼の世界観と極めて自然に両立することを考慮に入れれば、縦令(たとい)明確な証拠はあげ得ぬまでも、極めて多くの蓋然性を持つと云わなければならぬ。80 年代の半ばに脳裏に熟したことが 90 年代の末に近く実現の途に就く。ファウストの救いのイデーが中心に立つと共に、『第一部』の最後の仕上げが進歩し、『第二部』の根本構想が決定する。第一部にせよ第二部にせよ、構想と実現との間に多くの年月を挿(はさ)んでいるのは、芸術的機縁の成熟の時期に関わっている。我々が特に『第二部』の成立を問題とするとき、出発点を伊太利旅行にとっても恐らくは大過がないであろう。

私はこの辺で遡源の作業を打ちきる、そうして今は流れに従って舟をやりつつ、第二部の成立過程を叙述することを試みる。---第二部の或部分は、縦令「詳細を欠く姿」に於いてであっても、ファウスト制作の抑々の始めから、ゲーテの構想に含まれていた。例えば「ヘレナ」の如きがそれである。併しそれが未だ何等の形をも残すに及ばぬ先に、1775 年のヴァイマール移住が行われ、『第一部』の一部分のみが「ウルファウスト」の姿に於いて結成した。其処に十余年に亙るヴァイマール初期の休止が来る。1786-8 年、

彼が伊太利旅行中に再び『ファウスト』の仕事に帰る頃には、神与の奔馳するに任せて書きまくった狂風迫進の時代は既に過ぎていた。静かな、理性的な、豊かな内生の盆涌(ふんよう)を明澄な叡智の中に捕捉する壮年期の成熟が、ファウストの制作態度にも亦著しい変化を齎(もた)らした。今や彼は始めて全篇のプランを作り、このプランに従って罅隙(こげき)を埋め行くことに努力する。彼が伊太利旅行中若しくはその直後に実際仕上げたものは、『第一部』の「魔女の厨」と「森と洞」との場に過ぎなかったが、前述せる理由によって、全篇に渡る救済のイデーと『第二部』の結構も亦著しき成長をこの間に遂げていなければならぬ。併し諸種の事情が愈々筆を下す時期を後らせた。1800年に「ヘレナ」の劈頭(へきとう)、フォルキュアス・メフィストーフェレスと侍女達との口争いの半ばまでが出来た。これと前後して、宮廷の場やファウストの死に関する断片も出来た。併し1805年に激励者シラーが死に、1806年に『第一部』の原稿が完成すると共に、『ファウスト』の制作は再び仮死の状態に陥る。そうして此の度は殆ど20年の間、それは蘇生することなしに経過した。かくて1825年に、我々が劈頭に述べたような、静かな、連続的な労作の時代が漸くやって来るのである。

『ファウスト』の第一部と第二部との間には何故にこれほどの仮死時代が挟まれなければならなかったか。十九世紀の初頭に於ける欧羅巴政情の多事とこの間に処するヴァイマル公国の多難、次々に湧き来るゲーテの新計画とこれへの没頭等、こういうものも固より重大なる理由となっているが、主要原因として挙ぐべきものは、寧ろ『ファウスト』の仕事そのものに内在する特殊の困難であったであろう。それは『第一部』の場合のように、中心イデーの確立とその貫徹に時間を要したという訳ではない。『第二部』のイデーも『第一部』のそれと同時に与えられていた。併し「ウルファウスト」の作者と『第一部』の完成者との間におのづからに発生した心境の相異と、この懸隔に架橋する作業の困難とは、『第一部』と『第二部』との間に於いて更に倍加するものがあつたであろう。『第一部』の場合には、ゲーテは猶、「十五年の歳月によって何物も失われず、私は今や再びその糸を発見したと信ずる」といい、「全体の調子(トーン)についても私は安心してゐる。私は既に新しき一場を完成したが、その紙を燻(くす)べさえずれば、何人もこれを旧稿と見わけることが出来まいと思う」と喜ぶことが出来た。実際彼は、「私が長い休息と隔離とによって、自分自身の存在の水準に申し分なく連れ帰られて見ると、著しく眼につくのは、どれほど私が自己同一を保っているか、私の内部が歳月や遭逢によって変えられたことがどれほど少ないか、ということである」(『伊太利紀行』、1788年、3月1日、羅馬)と、自ら驚いているのである。

自彊不息(じきょうふそく)のゲーテにあつても、二十五歳の青年と四十歳の壮年との間については、一皮剥いて見ればこういうことが云い得たであろう。併し『第一部』と『第二部』との間に挟まって来るものは、前の場合にはなかった老齡である。將に七十歳に垂(なんな)んとするゲーテが『第一部』の調子に復歸することは、彼自身にとつても不可能に見えた。「第一部はグレーチヒェンの死を以て終わった、今それは遣り直しにもう一度始めなければ駄目である。これは本当にむずかしいことで、それをするのに、画家は今では異なつた手と異なつた刷毛とを持っている。彼が今制作することが出来るものは、前に書いたものとしっくり合わないであろう」(スルピス・ポアスレーへの談話、1815年、8月3日)。この疑懼はただ「人が新しいものから古いものを、前のものから後のものを見わけることが出来るだろうなどという心配に私は頓着しない」(ヴィルヘルム・フォン・フンボルトへ、1832年、3月17日)、という諦念によって乗り切ることが出来る。

固より調子の不整合から来る破綻は『第一部』の場合よりも『第二部』の方が軽い。『第一部』では、第一場の「夜」で、第一独白、地霊の出現及び消失、ヴァークナーとの問答など(605句まで)「初稿」の中にあるものの後を承けて、第二独白から幕切れまでを二十数年後に書き継がなければならなかった。又第二の「書齋」の場では、初稿の時に既に出来ていた新入生問答(1868以下)の前、契約の段の後半(1770-1867)を『断簡』が補い、更にメフィストの再登場から契約の段の前半(1530-1769)を『第一部』が補う。かくて事件と気分とに於いて直接に連繫する一場が、十数年、二十数年の歳月を隔てて

二段にも三段にも書き足されるとき、調子の一貫が如何に必要であり、而も如何に困難であるかは、想像に余りあるところである。併し『第二部』に於いてはこれほどの難問題がない。既成のものはただ「ヘレナ」の劈頭三百余句に相当する部分のみで、而もそれは未だ「北方的野蛮」の世界に踏み込まぬ希臘的韻律の領域である。従って同じ調子にその先を書き続けることは左ほどの困難を伴わなかったであろう。そうしてその他の部分は新しく書き進めて行けばそれでよいのである。従って『第二部』そのものの制作途上に於ける計画の動揺から全体の不整合に陥る危険に晒されるにしても----例えばブルダッハは「憂い」との対決の場に於ける重要な白(せりふ)(11410-11417)に於いてこの動揺を指摘する("Faust und die Sorge.")----それは『第一部』の場合に比較すれば知れたものである。『第二部』に於いてゲーテの感じた困難は、寧ろファウスト伝説の素材と、「50年以來、その目的や動機について考え抜かれ.....断片的に仕上げられ」て来た『ファウスト』全篇の結構との框(かまち)に、老齡の彼に自然な感興と気分と手法とが旨く適合してくれないところにあったであろう。換言すれば老齡に至って到達した「異なった手と異なった刷毛」とが『第二部』の進行を阻止して来たのである。

併しこの困難も亦克服の途がないわけではない。それはこの「異なった手と異なった刷毛」との権利を承認してこれを『第二部』に於いて支配させることである。そうしてグレーチヒェン悲劇の「小世間」を越えて、権勢や美や事業を追究する「大世界」裏のファウストを描出することを特殊使命とする『第二部』は、おのずから又この素材に適合する「異なった手と異なった刷毛」とを要求しなければならぬ。『第二部』に於ける素材の特殊性を、ゲーテは始めから十分に意識していた。「私達は先ず小世間、それから大世界を見るとしましょう」(2052)というメフィストの言葉が、既に第一部に於いてこの事を予告する。況して第二部制作の当時になっては、これが益々明晰の度を加えた。「凡そ第二部を書き継ぐ際には、人は必然に、従来の狭苦しき範囲から徹底的に超脱して、より高い境に於いて、より価値ある関係を貫いて、此の種の間人を導き行かなければならぬ」(Par. 123; 1. ----1826年12月)----「第二部は第一部のように断片的であってはならず、又あることも出来なかった.....其処には猶多くの、前とは異なる、立派な、真実な、又空想的な誤謬があつて、人間という可哀そうな奴は卑俗な第一部で行われたよりも、もっと気品あり、威厳あり、高尚な途に於いてその中に迷い込むことを許されているのだった」(リーマーへの談話1831年?)。

そうしてこの「より高い境、より価値ある関係」の中に於ける「気品あり、威厳あり、高尚な」迷誤は自然に第一部とは異なる芸術と手法とを必要とするのである。ゲーテはこの事をも亦意識していた。「取り扱いの特殊性を超脱してより多く一般性の中へ入り込まなければならなかった。特殊化と変化とは青年に属するからである」(同上)。そうしてゲーテは、偉大な色彩家ティチアンが、前にはあんなに具象的に模倣することを解していた同一資料を、高齡に至ってはただ抽象的に、例えば天鷲絨(ビロード)を描くにただそのイデーを描出するようになったことを、幾度もリーマーに話してきかせたという。此の如く一般性を----イデーを、描出せむとする手法が『第二部』の芸術を特色づける。そうしてこれと連関して悟性の要求を重視することが又その特徴となることをもゲーテは承知していた。「今、悟性が第二部に対して、第一部に対する以上の要求を持つ、この意味に於いてそれはより多く、理性的な読者を目標に仕上げられなければならなかった」(ヴィルヘルム・フォン・フンボルトへ、1831年12月1日)。

かくて直ちにイデーを目指して、思想の重みに枝たわわなる『第二部』の芸術が生まれる。それは固より『第一部』のそれに対して独自の存在理由を持つものであるが、又『第一部』に見られる困難をも伴うものでなければならぬ。人生と理想との殆どあらゆる層を包括してその上に穹窿を張り渡さなければならぬ構成力の緊張、無形にして捕捉し難き理念や情調に形体を与えなければならぬ表現の労苦----此れ等の殆ど不可能な課題は、老齡のゲーテを久しく『第二部』の制作から遠ざけていたのである。実際、1816年前後には、ゲーテは『ファウスト』の完成を断念しようとしてさえしていた。彼は当時執筆(おうしょう)しつつあった『詩と真実』にせめて彼の計画せる筋書きだけでも残して置くつもりでその梗概を書いた(Par. 63)。この梗概には固より古く企てたものとその後設

計変をしたものとの混合があるであろうが、兎に角これが『第二部』について我々の知りうる最初の形である。ゲーテはこの梗概を自叙伝の中に留めるのみで、1982年には従来の草稿を断片のままで出版してしまっ、『第二部』の計画を抛棄する積もりになんていた。

併しこの自叙伝の仕事こそ、ゲーテを再び『ファウスト』の世界に連れ帰る機縁となったものである。前掲『ファウスト』の梗概を挿入すべき自叙伝の第四篇は、1824年中に書き進められていた、そうして前年以來ゲーテの身边に接近して彼の最も忠実な助手となっていたエッカーマンは、自叙伝の制作を促進すると共に、『ファウスト』の完成を熱望して、この梗概を時に先だてて公表することを諫止(かんし)したらしい(『ゲーテとの対話』第一篇、1824年、8月10日)。『第一部』の場合に於けるシラーの如く、『第二部』の完成がエッカーマンに負うところが多いことは、ゲーテ自身も亦認めていたのである。そうして愈々『第二部』に着手する際にも、自叙伝に関する1775年代の回顧が直ちに『ファウスト』そのものの制作に移行したことは、我々が劈頭に於いて見て来た通りである。ゲーテが熟練な人形遣いの如く、多くの作品の糸を手握りつつこれを気分と時処とに応じて操りながら、幾つかの作品を同時に書き進めて行ったことは、今更指摘するにも及ばぬことであるが、その際甲乙の作品が交互に氣息を通わして制作衝動を温め合った趣は、この場合に於いても見ることが出来る。かくて1825年の2月末に、77歳の老人は遂に『第二部』の完成に向かって馬を進め出したのである。「本来ただ自発的な、活動する自然にとってのみ成功すべき筈のことを、決心と性格とによって遂行しようとする」のだから、其処には固より非常な困難がなければならなかった(フンボルトへの最後の書翰)。それにも拘わらずゲーテは敢えてそれをするだけの意気の充實を再び感じ出したのである。

詩人は従来の筋書きや草稿を整理したり見直したりしたあとで、先ず「ヘレナ」を書き継ごうとした。併しそれには計画の変更が先行する。シラー時代の「ヘレナ」も、希臘悲劇の人物らしく装い、希臘悲劇の語格を用いて語り、希臘風の合唱(コール)を伴うて登場する人々であったが、併し彼女とファウストとの邂逅の場処は中世風な独逸の古城と定められていた。1800年の草稿には「中世に於けるヘレナ。サティル劇。ファウストへの挿話」と題せられていたのである。ゲーテが当時から美しきヘレナを野蛮化しなければならぬ全体の筋立てを痛んでいたことは、1800年9月12日--16日のシラーとの往復書簡に徹すれば明らかであるが、このヘレナへの愛情は遂に詩人を動かして、伝説とは逆にファウストをスパルタの地に出現させることに計画を変更させた。影の国から浮かび出でてその美しき故郷に帰り、其処でファウストと寝食を共にすべきヘレナ---この筋立てには固より希臘の風土や歴史に対する深い智識を必要とする。徹底せる智識を求めることによってその詩的空想を養い上げるのは普段からのゲーテの流儀であった。これに役立てるものは、当時独立戦争とロード・バイロンの参戦とによって全欧の視聽を集めていた現代希臘の地理や気候や風土誌であった。就中 E. Dodwell : A classical and topographical tow through Greece, 1819. と Barthélémy : Voyage du jeune Anarcharsis, 1789. が特に重要な参考書となった。1825年の残余と1826年の始めとはこれ等の諸書の読破に費やされたが、読書の進捗と歩調を共にしつつ舞台が作者の脳裡に成熟して行ったのであろう。筆を下した後は極めて快速な進行を続けて6月24日にはもう完成していた。それは生前最後版全集の第四巻の一部分として1827年の春に "Helena, klassisch-romantische Phantasmagorie. Zwischenspiel zu Faust." という自嘲の響きを帯びた題名を以て、独立の一篇として公表された。成稿から発売までの十ヶ月を、植字校正の進行中も猶、彼は絶えざる推敲に費やしたのである。

ゲーテは「ヘレナ」の公表に先立って、それに前行して事件の進展を其処まで運んで行くべき、所謂 "Antecedenzien" (前半生)の筋立てを考え、これを「公示(アンクンディグング)」として本文の前に附することを企てた。我々は1826年6月10日と12月17日との日附ある二種の草稿を持っている(Par. 123 ; 1, 2.)。「ヘレナ」は抑々の最初からファウスト計画の中にあつたもので、これを書き終えずにはゲーテは如何にしても安んずることが出来なかつたであらう。併しそれだけに、これを産み終わるや彼の制作意

欲は再び暫時の虚脱状態に陥ったらしい。丁度『詩と真実』の為の梗概を書いたときと同様に、彼は此の度も「前半生」の梗概と既存の断片を公表してこれから脱却せむとする誘惑に攫(つか)まれた。そうしてフンボルトと共にエッカーマンが再びその全文の公表を諫止(かんし)する。一度印刷に附してしまえば、もう永遠に未完成のままにすることを恐れるというのである。後者の『ゲーテとの対話』、1827年正月15日の記事がこの間の消息の一端を推測させる----此の日エッカーマンは過日来の話し合いを承けて、第二部、特に「古典のヴァルプールギスの夜」の略描を公表せぬように、話をそちらへ持って行ったが、ゲーテはこの間に自分もそのことを考慮したらしく、意外にも直ちに彼に賛成して、あれを印刷させることはやめるように決心したという。これで完成して貰える望みが持てるようになった、とエッカーマンが喜ぶと、ゲーテは答えた----「四年半もかかればあれは仕上げられるだろう、併しその落ち付きが何処からやって来てくれるのだ? 日々私は非常に多くのことを要求される、すっかり世間と離れて一人になることはとてもむずかしい.....」。其処でエッカーマンは、貴君はこの冬に「ヘレナ」を仕上げられたでしょう、あの時だって今より邪魔が少なかったわけではありますまい、と云った。そうするとゲーテは「勿論それでも出来るのだ、出来なければならないのだ、だがそれがむずかしいのだ」と答えたのである.....。こんなにしてゲーテの腰は次第に据わって行った。それに、出版された「ヘレナ」の好評が彼の気をよくした。そうして此の年の首夏の頃から、彼の日記は『ファウスト』を呼ぶに「首要な仕事」を以てするようになったのである。

ゲーテは「ヘレナ」の後を追うて、此の年の五月には第四幕の始めに筆を着けていた(ツェルターへの書翰、5月24日)。併し生前最後版の全集第十二巻、『ファウスト第一部』のあとに花を添えようとする願望は、彼を序幕の仕事に呼び戻した。固よりそれはその以前にも全然書かれていないわけではなかった。エッカーマンが「風光明媚の地」の劈頭、アーリエルの歌やエルフ達の合唱を示されたのは1826年3月のことらしく(Vgl. Gräf, S. 326)、1827年5月6日に、彼の談話がファウストの暁の独白に及んでいるところを見れば、この部分も亦その以前に出来ていなくてはならぬ。従ってゲーテが今や新たに立ち帰って来たのは、第二場に当たる「皇帝の居城」以下に属するであろう。彼は第一場と第二場との間に、メフィストが出現して、ファウストをカイザーの宮廷へ誘致する場を置くことを計画したが、それは実現されずに済んだ。この第一幕に於いて最も構想の壮大な場面は「仮装舞踏会」の場であるが、そのためにゲーテは、彼自身が目撃した羅馬の謝肉祭の印象(『伊太利紀行』参照)は固より、ユーリウス・ツェーザルの凱行列を描いたマンテナの絵、マキシミアン皇帝の凱旋門及び凱旋車を描けるデゥラーのそれ等を参照した上に、Ptolomäus Philadelphusが第三世紀にアレキサンドリアに催したディオニュソス行列に関するAthenäusの記載、十六世紀の半ばLorenzo de' Mediciがフィレンツェで行った謝肉祭の歌謡集成(Grazzini: Tutti i trionfi, carri, mascherate o canti carnascialeschi andati per Firenze dal tempo dei magnifico Lorenzo de' Medici fino all'anno 1559. Seconda Edizione. 1750)等の文献をも渉獵(しょうりょう)しつつ想を構えた。併し仕事はこの度も順調に運んで、1828年の復活祭には「遊園」の場の半ば(6036句)まで、最後版全集の『第一部』に附載することが出来た。『第二部』がゲーテの生前に公表されたのはこれを以て最後とする。

併し彼の首要な仕事は猶倦まず前進する。(騎士の広間)をエッカーマンに読んできかせたのは1829年12月30日であり、これに先立つ「暗闇の廊下」の仕上げがすんで同じ人にこれを見せたのは翌年の正月10日であるが、第二幕の仕事もこれと並行して進みつつあった。彼が第二幕第一場に手をつけ出した痕跡は既に1827年9月12日の中に見られるが(Gräf, S. 410.)、その翌年7月26日のツェルター宛の手紙には「第二幕の始めが旨く行った」ことを明瞭に報告している。そうして第一幕が完成するころには第二幕の第一場第二場もほぼ出来上がっていたらしく、1830年正月17日に「古典のヴァルプールギスの夜」の起首をエッカーマンに朗読してきかせたゲーテは、その24日には今ファウストがヒロンと一緒にいる(7330句以下)ことを告げている。そうしてその6月の25日には、古典のヴァルプールギスの夜が出来上がったことを、同じ人に報告することが出来たのである。この場の途中で冥府に降って行ったファウストを其処の女王

ペルゼフォーネの前に出現させて、ヘレナの再生を切願させる場面は、第二幕の切れ、若しくは第三幕の序として、1825年から予定された計画であり、1830年の夏に至っても猶これが固執されているが(Par. 157-161.)、併し遂に完成されるには至らなかった。かくて今日の形に於ける序幕から「ヘレナ」への連絡は遂げられたのである。地域から云っても人物から云っても未聞の広さを持つ「古典のヴァルプールギスの夜」の場面を纏め上げるためには、ゲーテはその空想力の極度の緊張と共に、古典的智識の手が届く限りの総動員を必要とした。その為に「ヘレナ」への準備が役立ったことは云うまでもないが、彼は又ファルネジアにあるラファエロ作「ガラテアの行列」のような絵画にも補助を求めた。そうして彼の神話駆使の重要な参考書となったものは Hederich : *Gründliches mythologisches Lexicon*, herausg. von Johann Joachim Schwabe, Leipzig 1770 であった。又部分的には Lucanus : *Pharsalia* ; Plutarchos : *Bioi paralléloi* : (英雄伝、特に Pompeius に関するもの) J. Meursius : *Creta, Rhodus, Cyprus* : Amsterdam 1675. 等の諸書も利用されている。

かくて 1830年の夏までに前の三幕を仕上げたゲーテは、第四幕第五幕を如何にして完成したか。此処で最も多くの問題を含むものは第五幕の終末に属する部分である。既に『ファウスト』全篇の結構と彼の救済が確定する以上、彼の最後と彼の死の意義(従って死後に於ける彼の魂の運命)が作者の心眼に鮮やかに浮かんでいることは当然である。これを鮮やかに目に浮かべていればこそファウストの救済のプロットは芸術的に可能なのである。そうして我々が 1800年頃にファウストの死に関する断章を持っていることは前にも云った。そのみならず作者は全篇の終末が夙に出来上がっていることを繰り返し主張しているのである。1815年8月3日、ゲーテはスルピス・ボアスレーに答えて「最後(das Ende)ももう出来ている、而も最も油の乗った時代に、極めて旨く壮大に仕遂げている」と云ったという(Gräf, S. 215.)。これはただ筋立てのみの意味であるか、成稿を意味する言葉であるか、典拠となるものがボアスレーの聞き覚えを書き留めた日記に過ぎぬが故に、我々はこれを言葉通りに信ずることを躊躇しなければならぬ。併しゲーテが『第二部』の完成に乗り出した抑々の始めに「ファウストの終末(Schluss)を引き続き校訂す」(1825年3月13日、日記)と自記しているところを見れば、その頃には実際その筋立てが相応に完成した姿で存在して居り、其の詩句の或部分も可なりに書き進められていたらしく思われる。そうして 1827年5月24日、「もうずっと前に出来上がっている完全な終末」(.....dem völligen Schluss, der schon längst fertig ist.)とツェルターに書き送っているところを見ると、この時分に「完全な終末」まで出来上がっていたことは、最早疑問の余地がないようにも見えるのである。

併し 1820年代以後に属する遺稿 Par. 194, 195 はゲーテが「完全な終末」(ファウスト昇天の場)については計画の動揺を感じていたことを思わせる。この二つの筋立てに於いては、ファウストの魂を天使に奪われたメフィストの控訴と、基督の面前に於けるファウストの裁判が計画されていて、現在の「山峡、森、巖、荒涼の地」の場は、以上の計画を抛棄したあとでなければ書かれ得ぬ筈であるからである。問題の二つの遺稿は何時書かれて、それが Par. 196 のような設計に変わったかは明瞭でないが、兎に角我々は「完全な終末」を厳密に言葉通りに解することを暫く差し控えなければならぬ。それがファウストの「埋葬」の場に関する限り、それは何の矛盾もなく通用する。1825年4月6日、ゲーテはキュヴェーの娘の為に天使の合唱の「薔薇の歌」(11699-705)の自筆を送っているが、それはこの一場がその頃に完成に近づきつつあったことを証明する。故にファウストの死に関する部分がヘレナに先立つとも後れることなしに出来ていたと見らるべきであろう。そうして 1831年、正月4日、ゲーテが同じツェルターに、「第五幕は最後の最後まで(bis zum Ende des Endes)既に紙上にある」と念を押して書き送っているとき、我々は最早ファウスト昇天の場をも除外するわけに行かない。この事は同年6月6日のエッカーマンとの対話によって、疑惑の余地なく確かめられる。其処で彼はファウストの救いに対する鍵となるべき文句(11936-7----「何人にもあれ、絶えず努めいそしむ者を、私達は救いに導くことが出来る」)に対して注意を促し、又「超感覚的な、殆ど予感さえ出来ぬ事物」を表現して而も空漠に陥ることがないように、基督教的・教会的人物と観念とを用いる必要があったことを説いているのである。

同じ日にゲーテは第五幕の前半、フィレモンとバウギスに対する挿話を始めてエッカーマンに見せた。即ち第五幕は此処に完成したのである。第四幕もこれと平行して1831年の前半に書き続けられつつ、結局最後まで残った。併しそれも八月初めまでには完成して、草稿は表装され封印された。そうしてゲーテはこれを机上に置いて生前最後の誕生日を迎えたのである。彼がこの生涯の重荷を卸して、如何に喜び、如何にのびのびとした気分になったかは、九月以後の諸友や弟子達への手紙や談話によって十分に察知することが出来る。

併しそれは芸術的完成を遂げて隅々まで仕上げが行き届いた作品には未だなっていない----ゲーテはこの事を自ら熟知していた。従って封を解いて更にこれに筆を加えむとする誘惑を感じぬわけには行かなかった。1832年の正月9日、遂に彼は草稿の封を解いて娘(?)オットィリエの為に朗読し始めた。そうして其の月の29日に読み終わる迄の間、加筆修補の欲求が活潑の度を加えた。ゲーテの死後二日、司法大臣フォン・ミュラーがその女友に書き送った手紙に、ゲーテは数週間前に「俺の地上の日々の痕は幾劫を経ても滅ぶことがあるまい」(11583-4)という言葉で以てそのファウストを閉じたと云っているのは、必ずしも此の句を其の時に書いたという意味ではないであろうが、兎に角最後の朗読に際して又多少の修正や補筆を施したことは、彼の日記によっても想像することが出来る。それは完全な意味に於いて彼の遺贈(フェアメヒトニス)であった。彼の死の即年、遺稿の第一巻としてそれは出版された。